

特105

516

大分縣立病院勤務  
大分縣鍼灸會會長

小野田範司



# 新撰鍼灸科學

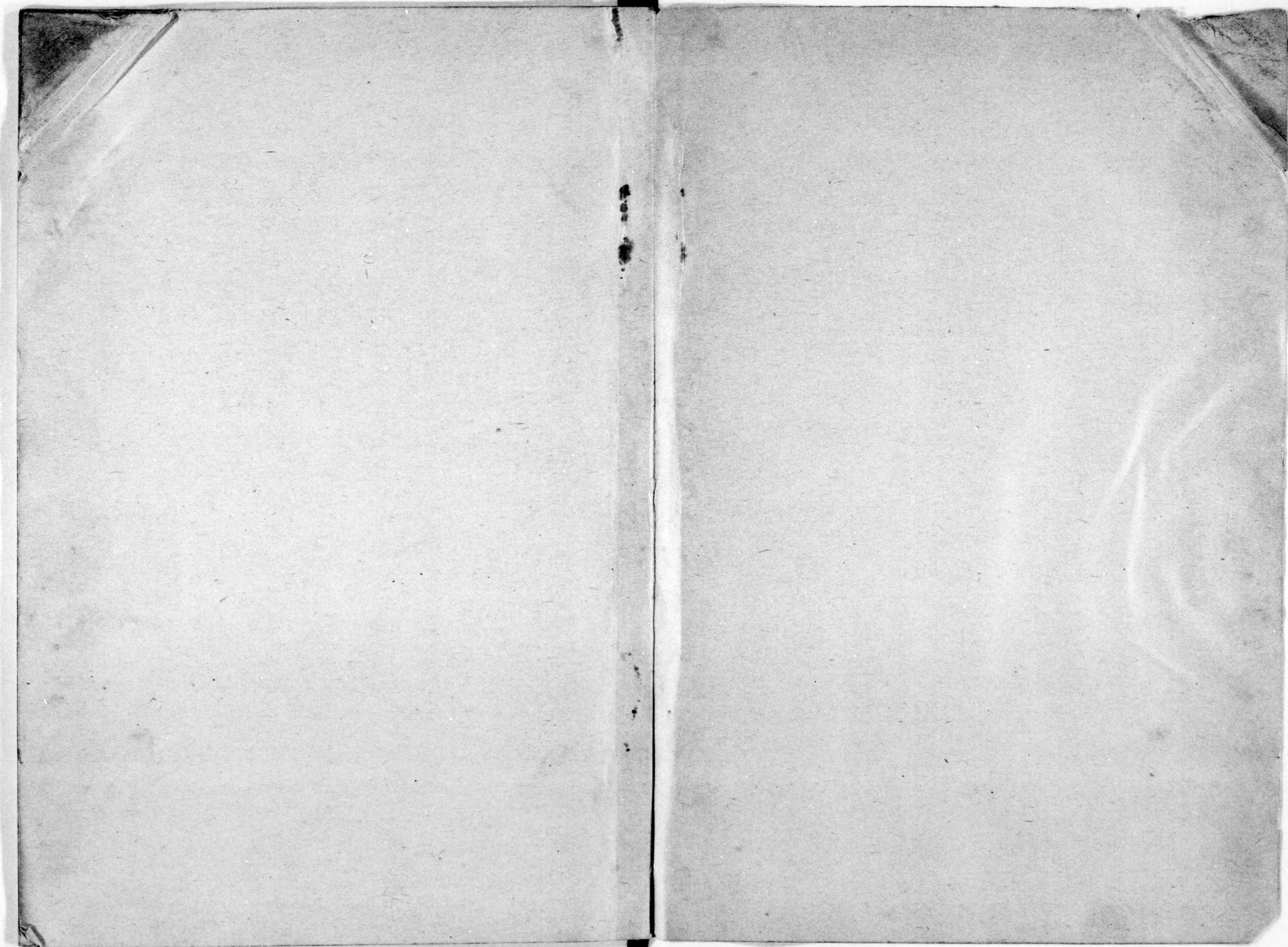
發行所 大分鍼灸講習所



# 始









特105  
516

緒言

本書は鍼灸術講習用として編纂せり著者の淺學菲才  
なる徒らに世の嗤笑を買ふに過ぎざるべしと雖也又  
た以て初學入門の一助たるを得ば著者の幸何ぞ之に  
過ぎむ若し夫れ文辭の硬澁記事の粗笨の如きは偏に  
讀者の叱正を俟つのみ

大正九年七月

於大分鍼灸講習所

小野田範司識

大正  
9. 8. 21  
内交



# 新撰鍼灸科學目次

## 第一編 解剖學

第一章 骨學	二
第一 脊柱	二
第二 肋骨	四
第三 胸骨 胸廓	四
第四 舌骨	五
第五 頭骨一頭蓋骨二顏面 骨三眼巢鼻腔口腔	五
第六 上肢骨一肩胛骨二鎖 骨三上膊骨四前膊骨 五手骨	七
第七 下肢骨一無名骨骨盤	九

## 二大腿骨三下腿骨四 足骨

第二章 關節學	二
甲 關節	二
乙 韌帶	三
諸關節	三
第三章 筋學	五
第一 背筋	一六
第二 腹筋橫隔膜	一七
第三 胸筋	一八
第四 頸筋	一九
第五 頭筋	一九



第六	上肢筋一肩胛筋二上 膊筋三前膊筋四手筋	二〇
第七	下肢筋一骨盤筋二大 腿筋三下腿筋四足筋	二二
第四章	身体の區別	二三
第一	頭部	
第二	頸部	
第三	胸部	
第四	腹部	
第五	上肢	
第六	下肢	
第五章	内臓學	二九
第一	消化器一口腔二咽頭 三食管四胃五腸六肝	二九

臟七	脾臟	
第二	呼吸器一喉頭二氣管 三肺臟	三三
第三	泌尿器一腎臟二輪尿 管三膀胱四尿道	三四
第四	生殖器一陰囊二睪丸 三輸精管四精囊五攝 護腺六カウヘル氏腺 七陰莖八卵巢九輸卵 管十子宮十一陰十二 女陰	三六
第五	血管腺一脾臟二甲狀 腺三副腎四胸腺 ○ 腹膜胸膜	三八

第七	五官器一皮膚二眼三 耳鼻舌	三九
第六章	血管學	四一
第一	心臟	四二
第二	血管	四三
甲	大動脈一上行大動脈 二大動脈弓三總頸動 脈四鎖骨下動脈五胸 部大動脈六腹部大動 脈○總腸骨動脈內外 腸骨動脈	四三
乙	肺動脈	四五
丙	大靜脈	四六
一	上大靜脈無名靜脈內	

第七章	神經學	四九
第一	神經中樞一腦髓二脊 髓	四九
第二	末梢神經	五一
一	腦神經	五一
二	脊髓神經一頸椎神經 二背椎神經三腰椎神 經四薦骨神經五尾閥 骨神經	五二
丁	肺靜脈	四八
二	外頸靜脈鎖骨下靜脈 下大靜脈門靜脈總腸 骨靜脈內外腸骨靜脈	四七
淋巴管及び淋巴腺		四八



第三 交感神経

五六

第二編 生理學

五七

第一章 循環生理

五八

第一 血液一血液の性状二

五八

血液の成分三血液製

造四血量五血液の作

用

第二 血液循環

六〇

循環徑路一心臟の作

用二血管の作用イ動

脉ロ毛細管ハ静脉

第三 循環器の神経作用

六二

淋巴及び其の流動

六三

第二章 消化生理

六三

第一 食物一營養質二食物

六三

三嗜好品

第二 食物の消化一口腔の

六五

作用二胃の作用三腸

の作用

第三 胃腸の神経作用

六七

第三章 呼吸生理

六七

第一 呼吸の意義區別

六七

第二 呼吸の作用一胸廓の

六八

運動二肺の作用三氣

道の作用

第三 呼吸器の神経作用

七〇

第四章 分泌及び吸收生理

七〇

第一 分泌物一唾液二胃液

七〇

三脾液四腸液五涙液

六胆汁七皮脂八粘液

九乳汁十汗十一尿十

二ノイモーム氏液十

三町寧

第二 内分泌物一甲状腺二

七四

副腎三胸腺四下垂体

五脾臟六睪丸七卵巢

八肝臟九脾臟

第三 吸 收

七六

第五章 体温生理

七六

第一 体 温

七六

第二 發温及び消温

七七

第三 体温の平均

七七

第四 体温調節

七八

第六章 運動生理

七八

第一 筋肉一筋の作用二筋

七九

の成分三筋の興奮性

第二 音聲及び言語

八〇

第七章 神経生理

八〇

第一 神経機能反射作用

八〇

第二 神経の刺戟物

八一

第三 神経中樞作用一脊髓

八二

二髓髓三小腦四大腦

第八章 五官生理

八三

皮膚眼耳舌鼻の各作

用



第九章 生殖生理

八五

一 精液二卵三月徑四

受胎五卵の發育六妊

娠の徵候

○ 新陳代謝

八七

第三編 鍼灸學

第一章 鍼治學

八八

第一 鍼治の意義

八八

第二 鍼の材料口鍼の

八八

各部ハ鍼の種類ニ毫

鍼の細大長短

第三 刺鍼一刺鍼法二鍼の

八九

徐刺徐抜三鍼の手技

四 鍼の術式五 鍼痕六

抜けざる鍼の處置七

折込たる鍼の結果八

刺戟の度九 刺鍼注意

の箇處

第四章 鍼の生理的作用附鍼

九三

治の目的

第五章 鍼の禁忌及び適應症

九四

第六章 施術に臨みての心得

九五

第二章 灸治學

九五

第一 灸治の意義

九六

第二 艾

九七

第三 灸の種類

九七

第四 灸痕

九七

第五 灸の生理的作用附灸

九八

治の目的

第六 灸の禁忌及適應症

九九

第七 施灸注意禁灸部位

一〇〇

第八 施灸時の心得

一〇〇

第三章 消毒法大意

一〇一

第一 鍼灸術と消毒

一〇一

第二 細菌の性状作用

一〇二

第三 消毒法一 理學的消毒

一〇三

法二 化學的消毒法附

消毒藥の性状製法

第四 消毒藥の稀釋度

一〇五

第五 實地消毒の順序

一〇六

第四編 治療學

一〇七

緒論 病病原 治癒

一〇九

第一章

消化器病の療法一 耳

下腺炎二 咽頭加答兒

三 急性胃カタル四 慢

性胃カタル五 胃擴張

六 胃痙七 神經性嘔吐

八 胃潰瘍九 胃癌十 急

性腸カタル十一 慢

性腸カタル十二 便

秘十三 腸疝痛十四 盲

腸炎十五 黃疸十六 胆

石疝

第二章

呼吸器病の療法一 鼻

カタル二 喉頭カタル

一一六



三氣管枝カタル四喘  
息五肺炎六肺癆七肺  
氣腫

第三章

泌尿器病の療法一腎  
臟炎二腎石疝三膀胱  
カタル四膀胱痲痺五  
膀胱痙攣六遺尿症

一一九

第四章

生殖器病の療法一陰  
萎二陰囊水腫三子宮  
內膜炎四子宮出血五  
月經性疝痛

一二二

第五章

胸腹膜病の療法一肋  
膜炎胸水二腹膜炎腹  
水

一二三

第六章

循環器病の療法一心  
臟內膜炎二神經性心  
悸亢進

一二四

第七章

神經系病の療法一腦  
充血二腦貧血三腦出  
血半身不隨症四脊髓  
癆五神經痛六三叉神  
經痛七後頭神經痛八  
助間神經痛九腰腹神  
經痛十股神經痛十一  
坐骨神經痛十二上肢  
神經痛十三神經痲痺  
十四顏面神經痲痺十  
五橫隔膜痙攣十六書

一二五

第八章

痙十七神經衰弱十八  
ヒステリ十九偏頭痛  
運動器病の療法一筋  
肉リヨウマチス二關  
節レウマチス三關節  
炎

一二三

第九章

全身病の療法一糖尿  
病二全身貧血三肥滿  
病四痛風五脚氣

一二五

第十章

雜病一齒痛二衄血三  
乳房痛四小兒急痢五  
小兒夜驚症  
兩面圖三葉

一二七



# 新撰鍼灸學

小野田範司著

## 第一編 解剖學

### 緒言

解剖學とは身体の構造を研究する學科なり而して身体を構成する器官は骨、皮膚、筋、靱帶、血管、神經、内臓及び結締組織等にして、これらの器官、互に連合して身体を形成するものなり又た此の器官は細胞と稱する小体の粘合質に由て集合し形成せられたるものにして斯く細胞より成れる部分を稱して組織と言ふ今各器官の作用を掲ぐれば骨は硬くして身体の基柱となし皮膚は身体を被包し筋肉は收縮して運動を司り靱帶は骨を連結し血管は血液を循環せしめ神經は知覺運動等を主り内臓は養分の攝取及び不養分の排泄並びに生殖の作用を営み結締組織は各器官を連結するものなり



# 第一章 骨學

骨は硬くして黃白色を帯び腐敗せざる性及び弾力性を有し身体の基柱をなす其の形狀に由て長骨短骨及び扁平骨の三種に區別す何れも内には腔洞ありて骨髓と稱する軟沱状のものを含有し外面には骨膜を被る、骨の總數は大約二百個にして互に連合し所謂骨骼をなす又骨は初め柔軟なれども成長するに従ひ漸次變化して硬くなるものなり然るに軟骨と稱するものあり此者は變化することなくして關節間、鼻中隔、眼瞼、耳翼、喉頭及び氣管等に存在す

骨骼は之を大別して軀幹骨及び四肢骨の二種となし更に軀幹骨を脊柱、肋骨、胸骨、舌骨、頭骨に別ち四肢骨を上肢骨及び下肢骨に別つ

## 第一 脊柱

脊柱は軀幹の後壁に於て正中に豎に位し三十三個の椎骨相重りて形成しS字形を呈し頭骨肋骨及び無名骨に連接す之を區別して眞椎及び假椎となす眞椎は上

の二十四個にして部位に由り其上七個を頸椎と言ひ下五個を腰椎と言ひ中央の十二個を胸椎と言ふ又た運動に由て區別する時は第一第二頸椎を廻旋椎と曰ひ其他の二十二個を屈伸椎と言ふ、假椎は九個にして上五個を薦骨椎と曰ひ下四個を尾閭骨椎と曰ふ然る後には癒合して各々一個となる即ち薦骨及び尾閭骨之なり

廻旋椎の中にて第一頸椎は環状をなし後頭骨に接し第二頸椎の上面より突出する指状突起を嵌入せしめ回顧の用に當る屈伸椎は其の形狀略同一にして椎体と椎弓とよりなり椎体は前部に位し橢圓形をなし軟骨板を嵌みて相重り椎弓は後部に於て椎体との間に大なる椎孔を有す此の椎孔は相連りて一條の脊柱管をなし脊髓を舍す而して椎弓よりは上下に向つて各々二個の關節突起を生じ左右に向つて横突起を生じ後方に向つて棘状突起を出す此の突起は皮下に現はれ恰も脊柱の節の如く見ゆ又た椎体より椎弓に移る處は椎間孔を形成して脊髄神經の出る處となる、薦骨は骨盤の後壁に位し上は第五腰椎に連り左右は無名骨に連り下は尾閭骨に連り後面の正中線に沿ふて五個の薦骨假棘を現はし其の左右に



は各々四個の後薦骨孔を備へ前薦骨孔と共に神經の出る處なる、尾閭骨は薦骨の下端に連り略三角形をなし内は脊柱管の終りをなす

### 第二 肋骨

肋骨は左右各々十二個にして胸壁に位し弓形の長骨にして後端は胸椎に連りし前端は肋軟骨を以て上七個は胸骨に連りし下三個は相合して第七肋軟骨に連り最も下部の二個は短くして游離す、肋骨を區別する時は上七個を眞肋骨と言ひ下五個を假肋骨と言ひ特に第十一十二を浮肋骨と言ふ又た肋骨の間を肋間腔と言ふなり

### 第三 胸骨

胸骨は一個の長骨にして前胸壁の正中に豎に位し左右兩側は肋骨に連り上端の左右は鎖骨に連接す而して胸骨は羅馬の古き劍に似たるを以て上部を手柄、中部を劍身、下部を劍尖と名く

### 胸廓

胸廓は胸椎肋骨及び胸骨の三十七個、肋軟骨と共に互に連合して形成したるものにして内を胸腔と言ひ心臟肺臓を舍す又た胸廓は錐体狀にして上下の二口を有す其の上口は小にして頸内に通じ下口は大にして腹内に通ず

### 第四 舌骨

舌骨は一個にして喉頭の上部に位し少々半月形にして中央を体と言ひ体の左右より大角及び小角と稱する突起を生じ靱帶に由て喉頭及び顚顚骨に連る

### 第五 頭骨

頭骨は二十二個にして之を頭蓋骨と顔面骨に區別す

一頭蓋骨は八個にして即ち前頭骨一後頭骨一蝴蝶骨一篩骨一顚顚骨二顚顚骨二なり以上の骨は互に連合して頭蓋腔を構成し腦髓を舍す而して前頭骨は前を



占め額をなし後頭骨は後に位し中央に後頭大圓孔を備へ頭蓋腔と脊柱管とを交通せしめ且つ皮下に外後頭結節を現はす蝴蝶骨は後頭骨の前に位し頭蓋腔の底をなす篩骨は蝴蝶骨の前に位し鼻腔の上部をなす顛頂骨は頭蓋の頂に位し正中線に於て左右のもの相合す顛顛骨は頭蓋の左右兩側に位し耳を備ふ

二顔面骨 は十四個にして即ち涙骨二鼻骨二上顎骨二下顎骨二口蓋骨二口蓋骨二下顎骨一なり以上の骨は二三の頭蓋骨と互に連合して眼窠、鼻腔及び口腔を構成す而して涙骨は眼窠の内壁にあり鼻骨は鼻背に位し顛骨は頰にありて後方に顛骨突起を出し顛顛窩の下界をなす上顎骨は顔面の中央に位し上齒を備ふ口蓋骨は上顎骨の後に位し口腔と鼻腔の境をなす下顎骨は鼻腔の左右側壁に位し下顎骨は顔面の下部に位し下齒を備へ兩端は角をなす之を下顎隅と名く此隅より上方は下顎枝にして末端に顆狀突起を備へ顛顛骨に連接す

眼窠鼻腔及び口腔

眼窠は眼球を舍す處にして鼻根の左右に在り前頭骨篩骨蝴蝶骨上顎骨涙骨口蓋

骨等より構成せられ鼻腔は空氣を通じ臭を嗅ぐ處にして蝴蝶骨篩骨上顎骨鼻骨下顎骨涙骨口蓋骨等より構成せられ中隔に由て左右に分たれ前後の鼻孔を備ふ又た口腔は食物を咀嚼し味覺を司る處にして上顎骨口蓋骨及び下顎骨等より構成せらる

第六 上肢骨

一 肩胛骨

上肢骨は左右各々三十二個にして肩胛骨鎖骨上膊骨前膊骨及び手骨に大別す

此の骨は背部の左右兩側に位し扁平三角形にして前面は肋骨に向ひ後面は上部に肩胛棘を備ふ棘の外端は肩峰突起となり鎖骨と連接して肩隅をなす又た肩峰突起の下方に當り上膊骨に運る關節窩を有す

二 鎖骨

此の骨は前胸壁の上部に位しS字形をなせる長骨にして内端は胸骨手柄、外端は肩峰突起に連接す



三 上膊骨

此の骨は上膊部に位する長骨にして上端は内方に向つて膨大し上膊骨頭をなして肩胛骨に連り其の外方には大小二個の結節を備ふ下端は滑車と小頭に分れ滑車は尺骨に連り小頭は橈骨に連る而して内外に隆起あり之を内上髌及び外上髌と云ふ

四 前膊骨

前膊骨は前膊に位する二個の長骨にして内側のもを尺骨と云ひ外側のもを橈骨と云ふ

尺骨は上端より前方に向つて上下二個の突起を生ず其の上のものを鶯嘴突起と云ひ下のものを鳥喙突起と云ふ此の突起の間は半月状截痕と稱して上膊骨の滑車に應ず又た鳥喙突起の外側は橈骨小頭に連接す下端は小頭と稱し三角軟骨を界して腕骨に連り外側は橈骨に連接して皮下に尺骨莖状突起を現す  
橈骨の上端は小頭と稱し上膊骨小頭に連り内側は尺骨に連接す下端は腕骨及び尺骨に連り同じく皮下に橈骨莖状突起を現はす

五 手骨

手骨は上肢の末骨に在り其の數二十七個にして之を腕骨掌骨及び指骨に區別す  
イ 腕骨は八個の短骨にして手根に位し四個づつ二列をなす之を拇指側より算ふれば上列は舟状骨半月状骨三稜骨豌豆骨にして下列は大多稜骨小多稜骨有頭骨鈞状骨なり而して上列は前膊骨、下列は掌骨に連接す

ロ 掌骨は五個の長骨にして腕骨と指骨との間に位し上端は腕骨、下端は指骨に連接す而して之を拇指側より算ふれば第一第二第三第四第五掌骨なり而して各骨の間を掌骨々間腔と云ふ  
ハ 指骨は十四個の小なる長骨にして指の基本をなす而して拇指は二個なるも其の他は總て三個なり

第七 下肢骨

下肢骨は左右各々三十一個にして之を無名骨大腿骨下腿骨及び足骨に區別す

一 無名骨



此の骨は薦骨の左右に位する不正扁平骨にして前部は左右相合し外面には髌臼と稱する窩を備へ大腿骨に連る元來無名骨は腸骨耻骨及び坐骨の三個よりなりたるものにして其の内、腸骨は上部を占め上縁は腸骨櫛と稱し皮下に現はる此の櫛の前後兩端は突隆す之を前上棘及び後上棘と云ふ耻骨は前部を占め前部は軟骨を以て左右のもの相合す坐骨は後下部を占め下縁に坐骨棘と結節を備ふ又た坐骨と耻骨との間には鎖閉孔と稱する孔を有す

骨盤

骨盤は胴の下部にして略、漏斗状をなし内に直腸子宮膀胱等を舍す而して第五腰椎薦骨尾閶骨及び無名骨より構成せらる又た骨盤は坐骨より薦骨に緊張する靱帯の爲めに腸骨との間に大小二個の孔を生ず之を大及び小坐骨孔と稱し血管神経を通す

二 大腿骨

此の骨は一個の大なる長骨にして大腿に位し上端は内方に向つて突出す之を大腿骨頭と云ひ無名骨の髌臼に連る又た頭の外方には大轉子及び小轉子と稱する

突起ありて大轉子は皮下に現はる下端は内外の關節に分れ脛骨に接続し中央の前に膝蓋窩、後に膝膕窩と稱する凹窩あり

三 下腿骨

下腿骨は三個にして其の内、脛骨及び腓骨は長骨なれども膝蓋骨は栗子狀の短骨にして膝の前に位す而して脛骨は内側、腓骨は外側にあり脛骨の上端は内外の關節に分れ大腿骨に連り其の外關節の後下部は腓骨に接続す又た前側には三角形の隆起あり之を脛骨前結節と稱す下端は腓骨と接続して跗骨に連り内方に内踝と稱する隆起を備ふ腓骨は上端を小頭と云ひ脛骨に連り下端は脛骨と合して跗骨に接続し外側に外踝と稱する隆起を現はす

四 足骨

足骨は下肢の末端にあり二十六個にして之を跗骨蹠骨及び趾骨に區別す跗骨は七個の短骨にして足根に位し其の内にて跟骨は後下部にありて踵をなし距骨は跟骨の前上部に在りて下腿骨に連り舟狀骨は距骨の前に位し内中外の楔狀骨は舟狀骨の前に位す又は骰子骨は舟狀骨の外側に位す



蹠骨は五個の長骨にして跗骨の前に位し趾骨は十四個の小なる長骨にして趾の基本をなし後端は蹠骨に連り踵趾のみ二個、他は何れも三個なり

### 第二章 關節學

#### 總論

甲 關節とは骨の連接したるものにして之に不動關節と可動關節の別あり而して不動關節には頭蓋骨の連接の如く全く動かざるもの、脊椎連接の如く軟骨板を嵌みて僅かに動くものとの別あり其の甲を縫合と云ひ乙を軟骨接合と云ふ又た可動關節は單に關節と稱ふるものにして其の構造及び運動の狀態に由て下の六種となす (イ) 肩關節の如く自由に動くものを全動關節と云ふ (ロ) 第一腕掌關節の如く屈伸及び内轉外轉をなすものを鞍狀關節と云ふ (ハ) 手關節の如きものを蹠狀關節と云ふ運動の模様は鞍狀關節に似たれども構造異れり (ニ) 肘關節の如く屈伸の運動をなすものを蝶番關節と云ふ (ホ) 橈尺關節の如く一

骨は軸となり他骨が其の軸に沿ふて廻旋するものを車軸關節と云ふ (ヘ) 腕骨互ひの關節の如く僅かに運動するものを叢合關節と云ふ

乙 靱帶は關節を維持するものにして囊狀靱帶と副靱帶の二種ありて囊狀靱帶は多く膜状をなし一骨より他骨に緊張して關節を全く包圍し關節腔を形成し副靱帶は多くは索状をなし囊狀靱帶の内面にあり同く甲の骨より乙の骨に緊張して囊狀靱帶を補助す又た囊狀靱帶の内面には滑液膜と稱する膜囊ありて滑液を分泌し關節の運動を自由ならしむ (別に固有靱帶なるものあれども關節には關係なし) 以下各關節に付き略述すべし

一 脊柱關節 第一頸椎は後頭骨と連接して載域後頭關節となし第二頸椎と連接して載域樞軸關節をなし回顧の用に當る其の他の眞椎は軟骨接合をなして屈伸運動をなす

二 肋骨關節 肋骨の後端は胸椎に連接して肋骨脊柱關節をなし前端は肋軟骨を以て胸骨に連り胸肋關節をなし共に僅かの運動をなす

三 胸鎖關節 鎖骨の内端と胸骨手柄との連接よりなる鞍狀關節なり



- 四肩峰鎖骨關節 は鎖骨の外端と肩峰突起との連接より成る叢合關節なり
- 五肩關節 は肩胛骨の關節窩と上膊骨頭との連接より成る全動關節なり
- 六肘關節 は上膊骨の下端と前膊骨の上端の連接より成る蝶番關節なり
- 七橈尺關節 は兩骨の上下兩端の連接より成る車軸關節なり
- 八手關節 は前膊骨の下端と腕骨の「列」より成る髁狀關節なり
- 九腕骨間關節 は腕骨互ひの連接より成る叢合關節なり
- 十腕掌關節 は腕骨の下列と掌骨の上端より成る叢合關節なり但し第一腕掌關節は鞍狀關節なり
- 十一掌骨間關節 は掌骨上端互ひの連接より成る叢合關節なり
- 十二掌指關節 は掌骨下端と指骨第一列の上端より成る全動關節なり但し拇指は蝶番關節なり
- 十三指骨間關節 は指骨、互ひの連接より成る蝶番關節なり
- 十四薦腸關節 一名薦腸軟骨接合は薦骨と腸骨との連接より成る
- 十五耻骨軟骨接合 は耻骨前端の連接より成る

- 十六股關節 は大腿骨頭と無名骨の髌臼とより成る全動關節なり
- 十七膝關節 は大腿骨の下端と脛骨の上端及び膝蓋骨より成る蝶番關節なり
- 十八脛腓關節 は二骨の上下兩端の連接より成る叢合關節なり
- 十九足關節 は下脛骨の下端と跗骨（距骨）より成る蝶番關節なり
- 二十跗骨間關節 は跗骨互ひの連接より成る叢合關節なり
- 廿一跗蹠關節 は跗骨（骰子骨楔狀骨）と蹠骨の後端より成る叢合關節なり
- 廿二蹠骨間關節 は蹠骨後端互ひの連接より成る叢合關節なり
- 廿三蹠趾關節 は蹠骨の前端と趾骨第一列の後端より成る全動關節なり
- 廿四趾骨間關節 は趾骨、互ひの連接より成る蝶番關節なり
- 廿五下顎關節 は顛顛骨の下顎關節窩と下顎骨顆狀突起より成る髁狀關節なり

第二章 筋學

總論



筋は收縮性を備へ身体の運動を営むものにして隨意筋及び不随意筋の二種あり  
 隨意筋は一名横紋筋と稱し骨格を圍みて身体の軟部をなす精神の指揮に隨ひ運  
 動す不随意筋は一名平滑筋と稱し主に内臓及び血管壁を構成して運動するも精  
 神の指揮に隨はず而して隨意筋は多くは骨より起り骨に終るものにして其骨に  
 附着する部は腱と稱する硬きものよりなる、尙筋の中央を筋腹と言ふ隨意筋は  
 極めて細き筋纖維の相集束して成り外面に筋膜と稱する薄膜を被るものなり  
 全身に有する筋は五百有餘にして之を軀幹筋及び四肢筋に大別し更に軀幹筋を  
 背筋腹筋胸筋頸筋及び頭筋に別ち四肢筋を上肢筋及び下肢筋に別つ

第一 背筋

背筋は大約十八個にして頭骨脊柱肩胛骨肋骨鎖骨上膊骨及び腸骨の間に彼此緊  
 張して種々なる作用を營爲す其内にて  
 僧帽筋は後頸部及び背部の皮下に位し後頭骨靱帶全胸椎より起り纖維次第に集  
 合して外方に走り肩胛骨及び鎖骨の外部に終り肩胛骨を脊柱に引く作用を營む

潤背筋は背部の下方及び腰部の皮下に位し第八胸椎以下腸骨櫛及び下三個の肋  
 骨等より起り纖維次第に集合して背部の外方を昇り上膊骨に終り上膊を後下方  
 に引く作用を營む  
 薦骨脊柱筋は脊柱の左右に位する長筋にして薦骨腸骨及び腰椎等より起り昇り  
 て頭骨に終る而して此筋は途中に於て肋骨又は椎骨等に附着す作用は軀幹を伸  
 展す

第二 腹筋

腹筋は五個ありて腹壁を構成す其の内にて  
 直腹筋は第五六七肋軟骨より起り臍の左右兩側を降り耻骨の前面に終り腹壁を  
 短縮する作用を營む  
 三菱腹筋は耻骨より臍の下方に亘る小筋にして白條(白條は腹の正中線にあり)  
 を緊張す

外科腹筋内斜腹筋及び横腹筋は共に腹壁の大部分を成し腹腔を狭少ならしむる



作用を営む又た腹壁には耻骨軟骨接合の上外方に鼠蹊管と稱する孔ありて男子は精系、女子は子宮圓韌帶を通ず尙ほ鼠蹊管の外下方には内股輪と稱する孔ありて下肢に循る血管神経を通ず

○ 横隔膜

横隔膜は廣き膜狀の筋にして胸腔と腹腔の界をなす第三四腰椎、下六個の肋骨及び胸骨劍尖より起り中央に位する臑質部に終る、臑質部は三葉狀をなす而して横隔膜には脊柱の前に大動脈裂孔を備へ其の前左方に食管裂孔を備へ其の右方に大靜脈管裂孔を有す此の筋は平常鉢を伏せたる如き狀を呈するも收縮する時は下りて扁平となり肺臟を下撃して吸息を營む故に吸氣筋の名あり

第三 胸筋

胸筋には八個あり其の内にて

大胸筋は前胸部の皮下に位し鎖骨の臼部、胸骨及び上五個の肋軟骨より起り纖維次第に集合して外方に走り上膊骨に終り上膊を前内方に引く作用を營む

前大鋸筋は腋下部の皮下に位する廣筋にして上九個の肋骨より起り後方に走り肩胛骨の内縁に終り肩胛骨を前外方に引く作用を營む  
肋間筋は各肋間に緊張し内外の二筋ありて内肋間筋は肋骨を下撃し呼息を營み外肋間筋は肋骨を上撃して吸息を營む

第四 頸筋

頸筋に十七個ありて下顎骨舌骨顚骨肩胛骨胸骨頸椎及び喉頭の間彼此緊張し種々の作用を營む其の内にて

潤頸筋は前頸部の皮下に位する廣筋にして鎖骨の下方より起り顔面の下部に終り頸部の皮膚を緊張する作用を營む

胸鎖乳嘴筋は鎖骨の内端及び胸骨手柄より起り上外方に昇り顚骨乳嘴突起に終り頭を前下方に引く作用を營む

第五 頭筋



頭筋に二十三個ありて顔面筋十八個、頭蓋筋五個なり其の内にて  
 咀嚼筋は下顎の運動を營むものにして咬筋顚顚筋内外翼状筋の四個あり而して  
 咬筋は顚骨より顚顚筋は顚顚窩より内外の翼状筋は蝴蝶骨より起り何れも下顎  
 骨に終る

口輪匝筋は口裂を鎖し眼輪匝筋は眼瞼破裂を閉す作用を營む又た頭蓋の皮下に  
 は帽状腱膜と稱するものありて其の前後左右は筋の附着する處となる

第六 上肢筋

一 肩胛筋 は三角筋棘上筋棘下筋小圓筋及び肩胛下筋の五個にして

三角筋は肩隅の外方に隆起する筋にして鎖骨及び肩胛骨より起り上膊骨に終り  
 上膊を舉上する作用を營む

二 上膊筋 は前側に二頭膊筋内膊筋烏喙膊筋の三個、後側に三頭膊筋あり二頭  
 膊筋は肩胛骨より起り橈骨に終り肘を屈する作用を營む  
 内膊筋は上膊より尺骨に亘り同じく肘を屈する作用を營む

烏喙膊筋は肩胛骨より上膊骨に亘り三角筋の作用を補助す

三 頭膊筋は肩胛骨及び上膊骨の上部より起り尺骨鷹嘴突起に終り肘を伸す

三 前膊筋 は前側に八個、後側に九個、外側に三個あり而して前側筋は上膊内

上膊及び前膊骨の上端より起り下りて橈骨腕骨掌骨手掌或は指腹に終り指及び  
 手根を屈し且つ前膊を廻前する作用を營み後側筋は上膊外上膊及尺骨上端等

より起り下りて橈骨掌骨或は指背等に終り指及び手根を伸し且つ前膊を廻後す  
 又た外側筋は上膊骨より起り下りて橈骨及び掌骨に終り手根を屈伸し且つ前膊

を廻後す而して前膊の下部に於て橈骨側より探る時は前側に内橈骨筋長掌筋淺  
 屈指筋及び内尺骨筋、後側に長伸拇筋短伸拇筋固有示指伸筋總指伸筋外尺骨筋、

外側に膊橈骨筋等の腱を容易に知る事を得べし

四 手筋 に十個ありて拇指球及び小指球を作り又た掌骨々間に緊張して各々指  
 の運動を營むものなり

第七 下肢筋



一骨盤筋 には九個ありて骨盤の内外に位ひす其の内にて  
 方形腰筋は第十二肋骨及び上四個腰椎より起り腸骨櫛に終り肋骨を下掣し腰椎  
 を外方に屈する作用を營む  
 腸腰筋は第十二胸椎腰椎及び腸骨窩より起り下りて大腿骨に終り大腿を屈する  
 作用を營む

大臀筋は臀部を成す大筋にして腸骨後部、薦骨及び尾閭骨より起り大腿骨に終  
 り大腿を外轉する作用を營む中臀筋小臀筋は股關節部に位し腸骨より大腿骨に  
 終り同じく大腿を外轉する作用を營む

二大腿筋 は前側に四頭股筋縫匠筋股鞘張筋の三個あり後側に半腱様筋半膜様  
 筋二頭股筋の三個あり又た内側には五個の内轉筋等あり其の内にて

四頭股筋は腸骨と大腿骨の上部とより起り下りて腱となり膝蓋骨に終り更に進  
 んで脛骨前結節に附着す此の部を膝蓋靱帶と云ふ本筋は膝を伸展する作用を營  
 む

縫匠筋は腸骨より脛骨に亘り下腿を屈し且つ内轉す

股鞘張筋は腸骨より大腿の外下部に亘り大腿筋膜を緊張す

二頭股筋半腱様筋及び半膜様筋は坐骨及び大腿骨の上部より起り脛骨或は腓骨  
 に終り膝を屈す而して膝窩の内側を下るものは半腱半膜の二筋にして外側を  
 下るものは二頭股筋なり又た内側筋は耻骨或は坐骨より起り大腿又は脛骨に終  
 りて大腿を内方に屈す(但し脛骨に終るものは膝を屈す)

三下腿筋 は前側に前脛骨筋長伸筋趾伸筋の三個ありて下腿の上部より起  
 り跗骨蹠骨或は趾に終り足根を屈し趾を伸展す、後側に腓腸筋比目魚筋膝膈筋  
 長總趾屈筋後脛骨筋及び長屈跗筋の七個ありて腓腸筋長足蹠筋は大腿骨より比  
 目魚筋は脛骨より起り共に腓腸部を構成してアキリス氏腱に終るアキリス氏腱  
 は跟骨に終る而して後側の筋は足根を伸し趾を屈す又た外側には長及び短腓骨  
 筋ありて下腿の上部より足部に亘り足蹠を外方に向はしむる作用を營む  
 四足筋 には十二個ありて各趾の運動を司る

第四章

身體の區別名稱



身体を大別して軀幹と四肢とを更に軀幹を頭、頸、胸、腹に分ち四肢と上肢と下肢に分つ又た胸腹の二部を合して胴と稱す

第一 頭部

頭は眉毛より項に線と周し以て頭蓋と顔面の二部に分つ

一頭蓋は毛髪の生じたる部にして骨に従び次の五部となす(イ)前頭部は眉毛の上方に前頭結節を現はし眉毛に沿て眉弓を現はす左右眉弓の間を眉間と云ふ

(ロ)顛頂部は左右に顛頂結節を現はす(ハ)後頭部は中央の下方に外後頭結節を現はし其の下方に項窩と稱する窩みあり(ニ)顛顛部は耳を備ふ耳の後に乳嘴突起を現はし前上部には顛顛窩と稱する窩あり

二顔面は次の七部に分つ(イ)眼部は鼻根の左右にして上下の眼瞼を備ふ此の眼瞼の間を眼瞼破裂と云ひ破裂の内端を内眦、外端を外眦と云ふ(ロ)鼻部は顔面の中央にして左右眼部の間を鼻根と云ひ鼻根の下を鼻背と云ひ尖りたる部を鼻尖と云ふ又た其の左右を鼻翼と云ふ内方に前鼻孔を備ふ(ハ)頰部は眼部の下

方にして中央に顴骨結節を現はす(ニ)口部は上下二枚の唇を備ふ唇の間を口裂と云ひ口裂の兩端を口角と云ふ(ホ)頤部は顔面の下部にして後方は下顎隅に移る

第二 頸部

頸部は乳嘴突起より肩隅に向つて線を引き以て前頸部と後頸部に分つ

一前頸部は中央に喉頭隆起(結喉)を現はす其の左右は上頸三角部と云ひ下方に胸骨上窩(頸窩)を現はす又た頤部の下を頤下部と云ひ其の左右を頤下三角部と云ふ鎖骨の上なる窩は鎖骨上窩と云ふ

二後頸部(項部)は髮際を以て頭蓋に境し第七頸椎の高を以て背部と境す

第三 胸部

胸部は肩隅より腋窩の前後に線を下し前後左右の四部に區別す

一前胸部(單に胸と云ふ)は胸骨に當る部を胸骨部と云ひ其の左右の上方を鎖



骨下部、下方を乳房部と云ふ又鎖骨下部の上外方に位置する窩を鎖骨下窩一名大胸三角筋窩と云ふ

二背部 (後胸部) は肩胛骨に當る部を肩胛部と云ひ其の上方を肩胛上部、下方を肩胛下部、左右肩胛部の間を肩胛間部と云ふ

三脇肋部 (腋下部) は左右兩側にして上方に腋窩と稱する窪みあり

第四部 腹部

腹部は第十二肋骨の前端より腸骨櫛に向つて線を下し以て前腹部腰部に分ち更に腸骨櫛を以て骨盤部を分界す

一前腹部 (單に腹部と云ふ) は一側の第十二肋骨と腸骨前上棘より他側の同處に向つて横線を設け更に左右第九肋骨の前端より陰部の兩側に縦線を引き以て腹部を九部となす而して上を上腹部、其の左右を季肋部と云ふ中央を中腹部、其の左右を側腹部と云ふ下は下腹部、其の左右を鼠蹊部と云ふ又胸骨劍尖の下なる窪みを心窩と云ふ

二腰部 (後腹部) は上方は第十二胸椎の高を以て背部と界し下方は第五腰椎の高を以て骨盤部に境し脊柱筋の外側なる窩を側腰窩と稱する者あり

三骨盤部 は後を薦骨部と云ひ其の左右の膨隆せる都を臀部と云ふ臀部の前方を股關節部一名轉子上部と云ふ又臀部の下なる皺襞と坐骨下溝(臀下皺襞)と云ふ前方は鼠蹊溝に移る而して此の左右の溝の間を會陰部と云ひ會陰部は前を陰部、後を肛門部、中央を會陰と稱す

第五部 上肢

上肢は肩隅より前後に下したる線に由て胸部と境し次の四部に分つ

一上膊部 は肩隅と肘との間に於て内外に淺き縦溝あり之を内、外二頭筋溝と云ふ

二肘部 は鶯嘴突起より上下に向つて各々二指横經を隔て線を廻し以て上膊及び前膊に境したる部にして前側に位置する窪みを肘窩と稱す内外には内上髌及び外上髌を現はし後側には鶯嘴突起を現はす



三前膊部 は肘と手根の間に於て下端の内外には尺骨及び橈骨莖状突起を現はす

四手部 は上肢の末端にして前膊に連る細き部を腕部と云ひ其の下方にて前面を手掌、後面を手背と云ふ手掌には拇指の根に拇指球、小指の根に小指球と稱する隆起あり而して指を外側より算ふれば拇指、示指、中指、環指及び小指と稱ふ又た拇指は二節、他は何れも三節ありて之を第一節(首節)第二節(中節)第三節(爪節)と云ふ

第六 下肢

下肢は鼠蹊溝及び坐骨下溝に由て腹部と境し次の四部に區別す

一大腿部 は胴と膝との間に於て前側の上部に三角形の窪みあり之を腸趾窩と云ふ外側の上部には大轉子を現はす

二膝部 は膝蓋骨の上際と脛骨前結節とより線を廻らしたる間に於て後に膝窩窩と稱する窪みを備へ前には膝蓋骨を現はし内外には關節髌を現はす

三下腿部 は膝と足根の間に於て前の上端には脛骨前結節を現はし下端の内外には内髌及び外髌を現はす又た後には腓腸部と稱する隆起を有す尙ほ外側の上部には腓骨小頭を現はす

四足部 は下肢の末端にして下腿に連る細き部を足根と稱し後端を踵と云ひ上面を足背、下面を足蹠と云ふ趾を内側より算ふれば躡趾第二趾第三趾第四趾及び小趾と稱す

第五章 内臓學

第一 消化器

消化器とは食物を消化する器官にして口腔、咽頭、食管、胃、腸、肝臓及び脾臓よりなる

一口腔 は上下顎骨の間に位する腔洞にして前は口裂に由て体外に通じ後は咽門に由て咽頭に通じ内面は一般に粘膜を被り齒、舌等を有す



イ 齒は上顎骨と下顎骨とより生じ齒齦にて維持せられ其の數、上下各々十六枚(小兒の乳齒は各々十枚)ありて前の四枚を門齒、次の一枚を犬齒、其の次の二枚を小臼齒、最後の三枚を大臼齒と云ふ

ロ 舌は口腔底に在り筋より成り粘膜を被る其の粘膜には數多の小突起あり之を舌乳頭と云ふ味神經の終る處となる

ハ 口蓋は口腔の天井にして前部を硬口蓋、後部を軟口蓋と云ふ而して軟口蓋の下端は懸壅垂と稱し後鼻孔を閉鎖する作用を營む又た其の下方の左右兩側に扁桃腺と稱する淋巴腺様のものあり

ニ 唾液腺は唾液を分泌する腺にして耳下腺顎下腺及び舌下腺の三對ありて耳下腺は耳の前下方の皮下に位し顎下腺は顎下三角部に位し舌下腺は舌の前下部に位し何れも排泄管を口腔に向て開く而して耳下腺は大きく舌下腺は小なり

二咽頭 は食物を嚥下する處にして上四個頸椎の前側に位し扁平漏斗状にして上端は頭蓋底に達し下端は食管に移りす而して鼓室、鼻腔、口腔及び喉頭に通ず其の構造は筋よりなり内面に粘膜を被る

三食管 は食物を胃に送る長さ管にして第五頸椎の高さに於て咽頭の下端より起り氣管の後と下り横隔膜の食管裂孔を徑て胃の噴門に移りす而して筋(中)粘膜(内)被膜(外)の三層よりなる

四胃 は食物を消化する囊にして横隔膜の下に於て左季肋部より上腹部に亘り斜に位し長梨子状にして上下の二口を有す其の上口は噴門と稱して食管に通じ下口は幽門と稱して十二指腸に通ず而して腹膜(外)筋(中)粘膜(内)の三層よりなり其の粘膜には胃液腺及び粘液腺を有す又た幽門には幽門辨と稱する輪狀の隆起あり

五腸 は身長の五六倍に達する長さ膜管にして胃に起り肛門に終る其の上五分の四を小腸と云び下五分の一を大腸と云ふ而して小腸は多く腹部の中央を充す之を十二指腸、空腸及び廻腸の三部に區別す十二指腸は上腹部に在り胃の幽門に起り先づ右方に走り次で下り更に左方に走り胃の下部に於て空腸に移る空腸は迂曲して中腹部を充し境なくして廻腸に移る廻腸も亦た迂曲して下腹部を充し終りは盲腸に移る又た大腸は腹部の周縁に沿ふて位し盲腸、結腸、直腸の三



部に區別す盲腸は大きくして右腸骨窩に位し下方に蟲様突起を有し上端は結腸に移る結腸は右側腹部を上行し肝臓の下面に至れば折れて臍の上部を左方に走り脾臓に達すれば更に折れて左側腹部を下行し左腸骨窩に至ればS字狀に彎曲して内方に進み薦骨の前に於て直腸に移る此の結腸は方向に由て上行結腸、横行結腸及び下行結腸の三部に分つ、直腸は薦骨及び尾閭骨の前側を下行して肛門に開口す而して腸も腹膜(外)筋(中)粘膜(内)の三層より成り小腸上部の粘膜には自閉辨と稱する輪狀の皺襞を有し廻腸と盲腸の境には廻盲辨を備へ尙ほ粘膜中には腸液を分泌する二種の腸液腺(葡萄狀腺管狀腺)並びに孤腺集腺を有し特に小腸の上部には絨毛と稱する數多の小突起を有するが故に其の面は恰も天鷲狀の如し

六肝臓 は胆汁を分泌し且つグリコーゲンを造る腺にして横隔膜の直下に位し右季肋部より上腹部に亘り楔狀にして上面は横隔膜に接し下面は胃の幽門部、十二指腸及び右腎等を蔽ひ中央に肝門を有し血管神經及び肝管等を通ず造構は肝細胞集合して肝小葉を造り小葉更に集合して肝臓を造り外面に固有膜及び腹

膜を被る而して肝細胞の間より起る細管は次第に集合し肝管となり肝門を出て胆嚢より來る胆嚢管と合して輸胆管となり十二指腸の内側に至りて開口す又た膽嚢は長梨子狀にして肝門の右前方に位す

七脾臓 は脾液を分泌する腺にして第一腰椎の高さに於て胃の後に位し恰も牛舌狀を呈す之より起る排泄管は輸胆管と共に十二指腸に開口す

第二 呼吸器

呼吸器とは五斯の交換を營む器管にして喉頭、氣管及び肺臓の三部より成る(鼻も呼吸器に属す)

一喉頭 は前頸部の中央に豎に位し漏斗狀にして上下の二口を備へ上口は咽頭に通じ下口は氣管に移行す而して九個の軟骨、靱常に由て連合し筋に由て運動すべく成り内面には粘膜を被る其の粘膜には中央に於て前後に走る左右二條の皺襞ありて之を聲門帯と云ひ左右聲門帯の間を聲門と云ふ空氣この聲門を通ずる際、強く聲帯振動すれば音聲を發するものなり



二氣管 は空氣を通ずるものにして喉頭の下端に起り食管の前側を下り胸腔に入り第五胸椎の高さに至れば左右の氣管枝に分れ各々肺門に達し右は三個、左は二個となり肺臓に入り更に數多の毛細氣管枝に分れて其の末端は膨脹す之を漏斗と云ふ周圍に肺胞を有するか爲め形狀恰も覆盆子の如し而して氣管は數多の軟骨輪を被膜及び筋に由て連合せられ内面に粘膜を被る然れ毛細氣管枝に至れば軟骨輪を失ふものごとす

三肺臓 は瓦斯の交換を營むものにして胸腔の左右に位し心臟を挾む形狀は錐體狀にして上端は肺炎と稱し鎖骨の上方まで達し下部は基底と稱して横隔膜の上面に接す外面は胸壁の内面に接し内面は心臟に向ひ中央の上部に肺門を備へ氣管枝血管等を通ず而して毛細氣管枝血管及び結締織等より成り恰も海綿狀をなして外面には胸膜を被る

### 第三 泌尿器

泌尿器は尿を分泌するものにして腎臓、輸尿管、膀胱及び尿道の四部より成る

一腎臓 は尿を分泌するものにして腹腔の後上部、第二腰椎の左右に位し蠶豆形にして内縁に腎門と稱する溝ありて内は腎竇となる而して皮質と髓質とよりなり外面に固有膜を被り脂肪囊に由て後腹壁に接す其の皮質中には數多の小囊あり之より細き管、起り迂曲して髓質に入り往復して遂に腎竇に開口す此の管は細尿管と云ひ囊はマルピキー氏小体と云ふ又腎動脈の枝はマルピキー氏小体内に入り糸毬狀血管を造り出て毛細管となり細尿管を纏絡す

二輸尿管 は尿を腎臓より膀胱に輸る管にして腎竇より起り下りて膀胱底の左右に開口す而して被膜(外)筋(中)粘膜(内)の三層より成る

三膀胱 は尿を貯る囊にして耻骨軟骨接合の後に位し卵圓形を呈す其の下端を膀胱底と云ふ此の底の前方は膀胱頸にして尿道の起る處なる而して被膜(外)筋(中)粘膜(内)の三層より成り筋は縦横の二纖維より成るものにして縦纖維は尿を搾り出すものにして利尿筋と云ひ横纖維の一部は膀胱頸に備ふる孔を閉すが故に括約筋と云ふ

四尿道 は細き管にして膀胱頸より起り男子は龜頭、女子は前庭に開口し尿を



体外に排泄する用をなす

第四 生殖器

生殖器は蕃殖を營むものにして男女に於て異れり其の男子に属するものは陰囊、睪丸、輸精管、精囊、攝護腺コウベル氏腺及び陰莖等にして女子に属するものは卵巢、輸卵管、子宮、腔バルトリン氏腺及び女陰等なり

一陰囊 は陰部に在りて睪丸を舍す

二睪丸 は精液を分泌するものにして陰囊内の左右に位し扁平卵圓形を呈す

三輸精管 は精液を送る管にして睪丸より起り上りて鼠蹊管を通り腹内に入り

下りて精囊に終る而して此の輸精管と睪丸に循る血管神経を被包したるものと

精系と云ふ

四精囊 は精液を貯る處の扁平なる囊にして膀胱底の左右兩側に位し前端は射

精管となりて尿道に開口す

五攝護腺 は攝護液を分泌する栗子狀の腺にして膀胱頸の部に在り 道の起始

部を圍む

六カウベル氏腺 はカウベル氏液を分泌する豌豆形の腺にして攝護腺の前方に

於て尿道の左右に位す

七陰莖 は交接の本器にして陰部にあり

八卵巢 は卵を分泌するものにして子宮体の左右に位し扁平卵圓形を呈し内に

數多のグラフ氏胞と稱するものを有す

九輸卵管 は卵を送る管にして子宮の左右に位し一端は細くして子宮体の上部

に開口し他の一端は大きくして卵巢に向ふ此の端は數多に分裂す之を剪彩と云ふ

十子宮 は胎兒を養ふ處にして直腸と膀胱の間に位し扁平梨子狀を呈し其の上

端は大きく(子宮底)下端は細く(子宮頸)して子宮口と稱する孔あり子宮内に通ず

而して筋と粘膜より成り腹膜を被る位置は靱帶に由て近傍の器官に連結し固定

せらる

十一腔 は陰莖を受容し且つ月經を通する處にして扁平の短官なり其上端は

子宮頸を圍み下端は体外に通ず



十二女陰 は陰部の諸部を總稱するものにして陰阜、陰唇、陰核、前庭等なり  
 乳房は生殖器と關係あるものにして前胸部、大胸筋の前に位し半球形又は鐘状  
 を呈し中央に乳頭を有す此の乳頭には數多の排泄管開口す而して妊娠すれば乳  
 頭の周圍は黒色に變ず

第五 血管腺

血管腺は他の分泌腺に似たる造構を有すれども排泄管なくして比較的大なる血  
 管を有し且つ血液内に一種の液を分泌するものなり

一脾臓 は血球を造る處にして左季肋部内に於て胃の左側に位し扁平卵圓形を  
 呈し内面には脾門と稱する溝ありて血管神經を通ず

二甲狀腺 は大切なる作用を營むものにして前頸部に位し氣管の前上部を蔽ふ  
 而して馬蹄鐵狀を呈す

三副腎 はまた大切なる作用を營むものにして腎臓の上端に位し略々三角形を  
 呈し恰も腎臟帽子の如し

四胸腺 は胸骨手柄の後方に位し小兒の間は發育盛んなれども成長の後には只た  
 痕跡を残すのみ其他尾閥腺及び頸動脈腺あれども共に血管の遺殘物にして麥粒  
 狀をなし甲は尾閥骨尖端の前に位し乙は頸動脈分岐部の内側に位す

○ 胸膜及び腹膜

胸膜及び腹膜は共に極めて薄き漿液膜にして内臓を被包し又は其の位置を固定  
 するものなり而して胸膜は胸腔にあり胸壁の内面と肺臓の外面とを被ひ其の間  
 に僅かの胸膜液を含有す特に心臓は心嚢と稱する二枚の膜にて被包せられ同じ  
 く二枚の間には心嚢液を有す、又た腹膜は腹壁の内面と内臓の外面とを被ひ間  
 に僅かの腹膜液を有す内臓の内にて胃腸肝臓等は腹膜に由て全く被包せらるれ  
 ども腎臓等は外にあり子宮膀胱等は大部を被はる特に小腸を纏ふものを小腸間  
 膜と云ふ

第七 五官器

(便利上此章ニ説ク)

五官器 此は知覺神經の終りて物を感覺する器官にして皮膚、眼、耳、鼻及び



舌を云ふ

一皮膚 は身体の外面を被包し弾力を有するものにして表皮、真皮、皮下結締  
織の三層より成り表皮は外層にして血管神経なし、真皮は中層にして血管  
神経、皮脂腺及び汗腺等を有し毛嚢を備ふ皮下結締織は真皮を骨膜及び筋膜に  
連結するものなり又た皮膚の一系列にして消化器、呼吸器、泌尿器及び生殖器等  
の内面に折れ込みたるものは性質を變じて粘膜となる此の粘膜は赤色にして數  
多の粘液腺を有し常に粘液を分泌す

二眼 は球形にして眼窠内に位し視神経に連り眼窠壁より眼球に緊張する六條  
の筋に由て運動すべく成る而して眼球は角膜及び白膜より成る外層と虹彩及び  
脈絡形より成る中層と網膜より成る内層とより成りて其内の前に水晶体、後に  
硝子体を含有し角膜の後に水様液を有す又た虹彩には中央に孔を備ふ之を瞳孔  
と云ふ光線は角膜瞳孔水晶体及び硝子体を通じて網膜に達し視神経に觸るもの  
なり尚ほ眼球の附屬物たる涙腺は眼窠の上外方に位し涙液を分泌す、用を終り  
たる涙液は鼻涙管を通りて鼻腔に入るものなり

三耳 は音響を感ずるものにして外部に現れたる部を耳翼と云ひ孔を外聽道  
と云ふ外聽道の終る處に鼓膜と稱する薄き膜あり其の内方は鼓室にしてエウス  
タク氏管に由て咽頭に通ず又た鼓室の深部は迷路と稱し蝸牛殻、前庭、半規管  
を備へ水液を含有す聽神経は茲に分布す尚ほ鼓膜より迷路に振動を傳ふる聽骨  
と稱するものあり、鼻及び舌は既に述べたれば茲に之を略す

### 第六章 血管學

#### 總論

血管とは血液を通ずる管にして其の中樞を心臓と云ふ、血管は之を動脈管、靜  
脈管及び毛細管の三部とす而して動脈は心臓より起り樹枝の如くに分岐して  
全身に布蔓し毛細管の媒介に由て靜脈に移行す、靜脈は漸次集合して心臓に歸  
る又た毛細管は名の如く極めて細き管にして網状を成す之を毛細管網と云ふ、  
今動脈と靜脈を比較するに動脈は管壁強厚にして大に弾力に富み血液を通ずる



に當て搏動を現はす然るに靜脈は管壁薄くして彈力鈍く且つ搏動を現はすことなし而して處々に辨膜を稱する扉の如きものを備ふ  
 更に靜脈には淺深の二種ありて淺靜脈は皮下を走り深靜脈は動脈に沿ひ一個の動脈に對し多くは二個あり而して深靜脈は動脈に沿ふもの多ければ其の經過も動脈の經過を知らは自然了解することを得べし

第一 心臓

心臓は血液を循環せしむる源にして胸腔内、左右肺臓の間に位し其の人の手拳大にして圓錐形を呈し大なる端を基底と稱し左右第三肋軟骨の高さに在り小なる端は心尖と稱し左胸の第五肋間(乳線の内方)に向ふ故に心臓は斜に位するものご知るべし造構は厚さ不隨意性横紋筋より成り内面及び外面は共に膜を被る而して内は縦隔に由て左心右心に分れ更に横隔ありて上下に分たる故に心臓の内は自ら四室となる其の上の二室を房と云ひ下の二室を室と云ふ此の房と室とは房室孔に由て相通ず房室孔は左は二尖辨、右は三尖辨を備ふ又た左室よりは大動脈、右室よりは肺動脈を發し左房には肺靜脈、右房には大靜脈開口す尙ほ室より動脈に移る部には左右ともに三個の半月辨を有す

第二 血管

甲 大動脈 は左室より起り心臓の前を上り右方に進み右第二肋軟骨の後に至れば後方に走り第三胸椎の左側に達し夫より脊柱に沿ふて下り横隔膜を経て第四腰椎の前側に達して左右の總腸骨動脈に分岐す之を區別すれば室より第二肋軟骨迄を上行大動脈、夫より第三胸椎迄を大動脈弓、夫より第四腰椎迄を下行大動脈と云ふ更に下行大動脈は横隔膜より上部を胸部大動脈と云ひ下部を腹部大動脈と云ふ其の枝別は次の如し

一 上行大動脈 の枝は左右の心冠狀動脈にして心臓に分布す

二 大動脈弓 の枝は上側より左總頸動脈、左鎖骨下動脈及び無名動脈を生じ下側より上氣管枝動脈を生ず此の動脈は肺臓に循るものなり而して無名動脈は直に分れて右總頸動脈と右鎖骨下動脈となる



イ總頸動脈 は頭に循る動脈の本幹にして氣管の左右兩側を上り上頸三角部に達すれば内外の頸動脈に分る

外頸動脈は夫より後上方に走り淺頰動脈及び内頸動脈となり且つ多くの枝を生じて主に顔面頭蓋及び頸の一部に循る

内頸動脈は頭蓋底より頭蓋腔に入り脳髓及び眼球等に分布す

□鎖骨下動脈 は上肢に循る動脈の本幹にして上外方に彎曲し第一肋骨を越へて腋窩動脈となり腋窩を通り更に進んで上膊動脈となり上膊の内側を下行し肘窩に達すれば分れて橈骨動脈及び尺骨動脈となり各々同名骨の前側を下行して手掌に達すれば吻合して淺掌弓及び深掌弓を造る而して其の經過中、數多の枝を生じて上肢に循り一部は脳髓頸部及び胸部に分布す

三胸部大動脈 の枝は肋間動脈下氣管枝動脈食管動脈等にして肋間動脈は第三以下の各々肋間に循り下氣管枝動脈は氣管に循り食管動脈は食管に循る

四腹部大動脈 の枝は次の如し(イ)下横隔膜動脈は横隔膜に分布し(ロ)内臓動脈軸は肝動脈脾動脈左胃冠動脈に分れて其の臓器に循る(ハ)上及び下腸間膜動脈

脈は腸に循る(ニ)副腎動脈は副腎に循り(ホ)腎動脈は腎臓に分布し(ヘ)内精系動脈は睪丸(女子は卵巢)に分布し(ト)腰動脈は腰部腹壁に循る又た腹部大動脈の末枝たる中薦骨動脈は尾閭骨腺に分布す

○總腸骨動脈は腹部大動脈より起りて外下方に走り薦腸關節の前に於て内外の腸骨動脈に分岐す

内腸骨動脈は骨盤内を下り數多の枝を生じて主に骨盤壁及び骨盤内の臓器(子宮膀胱等)に分布す

外腸骨動脈は下肢に循る動脈の本幹にして前下方に走り内股輪に入り股動脈となりて大腿の内側を下行し膝關動脈となり膝關窩を徑て其の下際に至れば前後の脛骨動脈に分岐す而して前脛骨動脈は上脛腓關節の下を通りて前に出で下腿の前側を下行して足背に至る又た後脛骨動脈は下腿の後側を下り内踝の後を徑て足蹠に至る以上の動脈は何れも數多の枝を生じて下肢に分布し一部は骨盤及び腹壁に循る

乙肺動脈 は右室より起り心臓の前を上り大動脈弓の下に於て左右に分れ進ん



て同側の肺門より肺臓内に入り更に無數の枝に分れ毛細氣管枝に沿ひて走り肺胞に達すれば之を纏絡す名て肺動脈毛細管網と云ふ

丙大静脈 には上大静脈及び下大静脈の別あり

一上大静脈 は右第一肋軟骨の後に於て左右の無名静脈、相集合して成るものにして夫より下行し右房に開口す

無名静脈は胸鎖關節の後に於て内外頸静脈及び鎖骨下静脈の合して成るものにして右は直に下り左は右方に走り上大静脈に終る

内頸静脈は頭蓋底より起り總頸動脈の外側を下行し無名静脈に終り頭部及び頸部の静脈を集む

外頸静脈は耳後及び後頭部の皮下に起り胸鎖乳嘴筋の後縁に沿ひて下行し無名静脈に終り主に後頭及び頸部の浅静脈を集む

鎖骨下静脈は上肢静脈の總幹にして鎖骨下に位す而して上肢の深静脈は動脈に沿ひて二條あり腋窩静脈に至りて一條となり鎖骨下静脈に終る又上肢には頭

静脈貴要静脈及び正中静脈と稱する浅静脈ありて甲は手背の拇指側より起り前

膊の外側及び上膊の前側を上りて腋窩静脈に終り乙は手背の小指側より起り前膊の内側を上り上膊内側の概ね中央に於て深静脈に終り丙は手掌より起り前膊の前と上り肘窩の下方に至れば分れて頭静脈及び貴要静脈に合す

二下大静脈 は第四腰椎の前に於て左右の總腸骨静脈、相集合して成るものにして腹部大動脈の右側を上りし横隔膜の裂孔を通りて胸腔に入り右房に開口し

徑徑中に於て横隔膜静脈腰静脈腎静脈内精系静脈及び肝静脈等を集む而して茲に一言すべきは門静脈なり此の静脈は胃腸及び脾臓等より起り一條となりて肝

臓内に入り岐れて肝小葉の間を走り遂に肝動脈の枝と共に肝静脈となる

○總腸骨静脈は薦腸關節の前に於て内外の腸骨静脈、相合して成り内上方に進みて下大静脈に終る

内腸骨静脈は骨盤内の静脈を集む

外腸骨静脈は下肢静脈の總幹にして外腸骨静脈に沿ひて位す而して下肢の深静脈も動脈に沿ひて二條あり又浅静脈は大小二個のサフヘナ静脈にして甲は足

背の踵趾側より起り内踝の前側を上りし大腿の内側に至り深静脈に終り乙は足



背の小趾側より起り外踝の後を徑て下腿の後を上り膝窩に至り深靜脈に終る  
 心臟靜脈は直に右房に歸流するものなり  
 丁肺靜脈は肺動脈毛細管網に起り左右各々二條となり肺門を出て左房に開口す

附 淋 巴 管

淋巴管は淋巴液を通ずる管にして數多の微細なる管を以て組織の間隙より起り處々の淋巴線を通過し漸次集合して遂に左右二條の大幹となり胸腔内に於て同側の無名靜脈に終る而して淋巴管にも淺深の二種ありて何れも徑過は靜脈に略々同じものごとす  
 淋巴腺は淋巴球を造り且つ淋巴液を濾過する作用を營むものにして梅實狀を成し一定の場所に位す其の數は身体中に大約四百個ありて肘部膝窩部腋窩頸部及び鼠蹊部の淋巴腺は人の能く知る處なり此の腺の腫張したるものを俗に根又は瘤と稱ふ

第七章 神經學

總論

神經は白色纖維狀にして中樞部より起り全身に分布す而して五管器に分布するものは物を感じするが故に知覺神經と云ひ筋に分布するものは運動を司るが故に運動神經と云ふ又た神經中樞とは腦脊髓にして頭蓋腔及び脊柱管内に位す尙ほ交感神經と稱し腦脊髓に關係なき獨立の神經ありて中樞部は脊柱前側の左右に位し節ある索の形狀を呈するを以て交感神經節索と云ふ之より發する神經は意識に關係なき血管、内臓及び腺等に分布し運動分泌等を主る而して枝に由り脊髓神經と相交通せり

第一 神經中樞

神經中樞は神經細胞、神經纖維及び結締織等より成るものにして腦脊髓及び神



經節等なり

一 腦髓 は頭蓋腔に位し略々球形にして腦膜に由り被包せらる此の腦膜は硬腦膜(外)蜘蛛膜(中)軟腦膜の三層より成り蜘蛛膜と軟腦膜の間には腦液を含有す今、腦髓を大体に區別し大脳、小脳、髓髓の三部をなす大脳は腦の大部を領し外面には數多の腦隆起と稱する凸を現はし正中を前後に走る溝(大脳縦裂)に由りて左半球及び右半球に分たる而して内部は白質、外部は灰白質より成り此の灰白質中には種々の神經中樞を有し且つ精神機能の現るころとなる

小脳は大脳の後下部に位し同じく正中に溝ありて左右に分たる此の小脳には運動の調節中樞あり

髓髓は小脳の前に位し大脳より蔽はれ下方は脊髓に移行す呼吸循環等の中樞ありて最も大切な部なり

二 脊髓 は脊柱管内に位し第一頸椎より第二腰椎の間を領し夫より下方は神經垂て馬尾狀をなす而して脊髓は圓柱狀を呈し内部は灰白質、外部は白質より成り外面に脊髓膜を被る此の膜も腦膜の一系にして三層より成り間に液(脊髓液)

を含む

第二 末梢神經

一 腦神經 は腦髓の下面より生じ分布地向ふものにして十二對あり之を前部のものより掲ぐれば次の如し

第一對嗅神經は鼻腔一部の粘膜に分布して臭を嗅ぐ

第二對視神經は眼球内の網膜に分布して物を視る

第三對動眼神經は眼筋に分布して眼球の運動を司る

第四對滑車神經は同じく眼筋に循環り眼球の運動を司る

第五對三叉神經は顔面頭蓋に分布して知覺を主り且つ咀嚼筋の運動をも司る

第六對外旋神經は又た眼筋に循環り運動を司る

第七對顏面神經は顔面頭蓋の筋に分布して運動を司る(但し咀嚼筋には循ず)

第八對聽神經は耳の迷路に循環り音を感覺す

第九對舌咽神經は鼓室、舌根及び咽頭等に分布して知覺運動を主る



第十對迷走神經は髓髓の上外部より起り頭蓋底の孔(頸靜脈孔)を出て内頸靜脈に沿ふて下り胸腔に入て更に食管に沿ふて進み胃に達す而して耳、喉頭、氣管、肺臟、咽頭、食管、胃及び心臟等に分布し知覺運動を司る

第十一對副神經は胸鎖乳嘴筋及び僧帽筋等に分布し運動を司る

第十二對舌下神經は舌及び舌骨下部の諸筋に分布し運動を司る

以上の内にて嗅神經視神經及び聽神經は知覺神經にして働眼神經外旋神經滑車神經顏面神經副神經及び舌下神經は運動神經なり又た三叉神經舌咽神經及び迷走神經は知覺と運動の混合神經なり

二脊髓神經 は三十一對ありて後根(知覺根)と前根(運動根)を以て脊髓の左右兩側より起り合して脊柱の椎間孔を出て分れて前枝及び後枝となり前枝は前頸部、胸の前方、四肢及び内臟の一部に分布し後枝は軀幹の後壁に分布す今脊髓神經を部位に従ひ區別して頸椎神經背椎神經腰椎神經薦骨神經及び尾閶骨神經とす

一頸椎神經 は八對ありて後枝は後頭部及び後頸部の筋と皮膚とに分布す、其

の内にて第二頸椎神經の後枝なる大後頭神經は上りて後頭部及び顛頂部の皮膚に循る、前枝の上四個は内頸靜脈の後方に於て相集合し頸神經叢を造り次の枝を生ず(イ)小後頭神經は後頭部に循り(ロ)大耳神經は耳翼及び耳後に循り(ハ)下頸皮下神經は前頸部に循り(ニ)鎖骨上神經は鎖骨下部に循り(ホ)下行項神經は頸椎前方の筋に循り(ヘ)横隔膜神經は横隔膜に循る而してイロハニは知覺枝にしてホへは運動枝なり又た下四個は第一背椎神經の一部と合し鎖骨上窩の深部に於て膊神經叢を形成し之より發する枝は胸廓の一部と上肢に分布す

而して胸廓に分布するものは前後及び側胸廓神經、鎖骨下神經(胸)上及び下肩胛神經、腋窩神經(肩胛)等にして上肢に分布するものは次の如し

内膊皮下神經は上膊内上部の皮膚に分布す

中膊皮下神經は前膊尺骨側の皮膚に分布す

外膊皮下神經は前膊の橈骨側に分布し上膊にも枝を分つ

橈骨神經は上肢中にて最も大なる神經にして上膊動脈の後側を徑て肘窩の外側に至れば數枝に岐れて前膊の外側と後側並びに手背の拇指側に分布し上膊にも



枝を分つ

尺骨神經は上膊動脈に沿ふて下行し内上髁の後より前に出て尺骨に沿ふて下り手掌の小指側に達し筋と皮膚とに分布し途中にて枝を分つ

正中神經は上膊動脈の前側を下り肘窩の部に至り夫より前膊の前側を徑て手掌に達す

以上の内にて内膊及び中膊皮下神經は知覺神經にして他の四神經は知覺運動の混合神經なり

口背椎神經は十二對ありて後枝は背部の筋と皮膚とは分布し前枝は肋間神經となりて各々肋間に分布し且つ胸骨の下方及び脇肋部にて皮下に現はれ皮膚にも循る而して下五個の肋間神經は其の末端、上腹部に分布す

ハ腰椎神經は五對ありて後枝は腰部の筋と皮膚とに分布し前枝の上四個は方形腰筋と腸腰筋の間に於て相合し腰神經叢を造る此の叢より發する枝は主に下腹部及び下肢に分布す

腸骨下腹神經は腹壁に分布す

腸骨鼠蹊神經は陰部及び鼠蹊部に分布す

陰部股神經は精系及び大腿の上部に分布す

外股皮下神經は腸骨前上棘の下を徑て大腿外側の皮膚に循る

股神經は下行して腸趾窩の部に至れば數枝に分れ大腿の前側及び内側に循り一枝は進んで下腿の内側を下り足部に達す之をサフヘナ神經と云ふ

閉鎖神經は大腿内側の筋に分布す

二薦骨神經は五對ありて後枝は臀部及び薦骨部に循り前枝の上四個は第五腰椎神經と共に薦骨の左右前方に於て薦骨神經叢を造り直腸膀胱等に枝を與へ専ら骨盤及び下肢に分布す

上臀神經は股關節部及び大腿の外側の筋に循る

下臀神經は大臀筋に循る

總陰部神經は陰莖肛門部及び會陰等に分布す

後股皮下神經は大腿後側の皮膚に分布す

坐骨神經は体中にて最も大なる神經にして大坐骨孔より骨盤を出て大轉子と坐



骨結節の間を経て大腿の後側を下行し概ね中央に至れば分れて脛骨神経及び腓骨神経となる而して脛骨神経は膝窩窩の正中を下り下腿後側筋の間より内側の後を経て足蹠に達し大腿下腿及び足蹠等に枝を興ふ又た腓骨神経は膝窩窩の外側を下り腓骨小頭の部に至れば淺深に分れ淺腓骨神経は下腿の外側を下りて足背に達し深腓骨神経は下腿の前側を下りて足背に達し大腿下腿及び足背等に枝を興ふ

木尾閻骨神経 は一對にして後枝は腎部に循り前枝は第五薦骨神経と合して尾閻骨神経叢を造りて其の部に循る

### 第三 交感神経

交感神経は總論に於て大略を述べたり其中樞部たる神経節は大約二十五對なり  
頸神経節は三對ありて之より發する神経は主に頭部頸部の血管並に心臓等に分布す

胸神経節は十一對ありて之より發する神経は大血管及び肺臓に分布し大小の内臓神経を大陽叢に送る

腰神経節は五對ありて之より發する枝は腹内の各臓器に循る特に大小内臓神経及び迷走神経と共に内臓動脈軸を圍みて大陽叢を形成す此の叢は交感神経の造る叢中にて最も大なるものなり

薦骨神経節は五對ありて之より發する神経は尾閻骨神経節(一個)より發するものと共に骨盤内の臓器に分布す  
尚ほ此の交感神経は全身の血管及び汗腺等に分布するものなることを怠るべからず

## 第二編 生理學

### 緒言

凡そ生理學とは生物の生活現象を講究する學科なり而して生活現象とは生物に



現はる、營養、發育、蕃殖、運動その他、種々の神經作用等の總稱なり生理學は之を區別して動物生理學植物生理學及び下等生物生理學の三種となす本書は即ち動物生理學中の人體生理學を説くものなり

### 第一章 循環生理

#### 第一 血液

一血液 は赤色の中性液にして臭氣と鹹味とを具へ攝氏三十七度五分の温度を有し血管外に出せば凝固するの性あり而して此の凝固するは纖維素と稱する蛋白質の存するに依るものにして血液は此の性あるが故に若し血管に損傷を蒙り出血する場合は其の傷口にて直に凝固し出血を制止するを得べし  
二血液 は血漿と血球及び血小板等より成り瓦斯をも含有す而して血漿は無色透明の液にして血清と纖維素とよりなり血球は血漿中に浮游する小なる細胞にして赤白の二種あり赤血球はろの質、柔軟にして弾力を有し貨幣狀を呈し中に色素を含有す此の色素は酸素と抱合し酸化色素となるの性ありて赤血球

が肺臟にて攝取したる酸素を組織に送り組織に生ずる炭酸を肺臟に送るは全く此者の爲めなり白血球は無色にして桑實狀を呈し常にアメーバ様の運動をなして血管外に出で組織を往來し色素、顆粒及び脂肪等を運搬し或ひは有害微菌等を喰盡す又た血小板は赤血球に似たる無色の小体にして血液の凝固に關係あるものなり瓦斯は酸素、炭酸及び窒素にして一部は血漿中に溶解し一部は血球と化合して存す

三血液 の内赤血球は骨髓(胎兒は肝脾よりも)より生じ肝臟及び脾臟にて破壊せられ白血球は脾臟骨髓及び淋巴腺等より生じ脾臟にて赤血球に變化す

四身体 に有する血液は大人にありては大約体重十三分の一、小兒は十九分の一なり故に体重十三貫目の人にありては一貫目(二升餘)の血液を有する割合なり而して人は血液全量の半以上を失ふ時は死亡するに至るものどす

五血液の作用 は胃腸より攝取せる養分と肺臟より攝取せる酸素とを組織に送り與し組織に生じたる老廢分と炭酸とを皮膚腎臟及び肺臟等に運搬して体外に排泄せしめ兼て身体處々の温度を平均せしむるものなり一言にして盡せば血液は



新陳代謝の媒介と温度の平均を営むものことす

第二 血液循環

甲血液 は自己の作用を営む爲めに絶えず血管内を循環するものにして之を大循環及び小循環の二種に區別す而して大循環とは心臓の左室より出て大動脈全身毛細管及び大静脈を通過して右房に歸るものを云ひ小循環とは心臓の右室より出て肺動脈肺毛細管及び肺静脈を通過して左房に歸るものを云ふ其の作用を揚ぐれば大循環は毛細管の部に於て血液中の養分と酸素とを組織に附與し組織に生ずる老廢分と炭酸とを血液中に攝取す故に鮮紅色の動脈血は變じて暗紅色の静脈血となる又小循環は同じく毛細管の部に於て血液中の炭酸を肺胞内に排泄し肺胞内の酸素を血液中に攝取す故に暗紅色の静脈血は變じて鮮紅色の動脈血となる斯くの如くなるを以て大静脈右心及び肺動脈の血液は静脈血にして肺静脈左心及び大動脈の血液は動脈血なりとす而して血液循環の原因は血圧(血液の壓す力)の不均にして其の不均は心臓及び血管の収縮に基くものなり

り

一心臓 は血液を循環せしむる源にして房と室は交代に縮張して静脈血を吸入し動脈血を排泄す其の状恰も唧嚢の如し即ち先づ房は弛緩して静脈血を吸入し収縮して之を室に送る此の時室は弛緩して血液を受容し収縮して動脈管に射出す而して血液の逆流するここなきは房室孔及び動脈口に備ふる辨膜の作用に依るものなり又心臓は運動するに當つて心悸動及び心音を現はす其の心悸動は室の収縮する時に心尖が左胸の第五肋間(乳線の内方に當る)に衝突するに由り發するものにして通常之を鼓動と云ふ又心音は第一音と第二音の別ありて第一音は短くして高清晰なり第二音は長くして低濁なり尙ほ第一音は室の収縮する時に發し第二音は室の將に擴張せんとする時に發す

二血管 の作用は動脈と静脈に於て強弱あり

イ動脈 は心臓より射出し出る血液の爲めに一時擴張せらるるも固有の弾力に由て直に収縮す動脈は此の弾力あると室の収縮する力に由て血液を毛細管に向て輸送するものにして其の輸送の際に動脈管の動搖を來す之を脈搏と云ふ



脈搏は壯年の男子にありては一分钟内凡そ七十二回にして女子及び老人は稍々多く、小兒は最も多くして百三十乃至百四十を算ず然れ種々の原因に由て増減あり例へは精神の感動、温浴又は運動等は其の數を増加し安息、睡眠又は空腹等は其の數を減ずるが如し

口毛細管 も亦た收縮して血液を動脈より受け靜脈に送る然れ尿管の小なるこ、室より受くる壓力の微弱なるに依りて輸送する力、甚だ緩徐なり

ハ靜脈 は血液を輸送する力、極めて弱しと云雖毛細管より來る壓力と房の吸引力とに由りて絶へず血液を輸送す而して呼吸運動、筋の運動又は動脈の搏動等も其の流通を補助す尙ほ處々に辨膜あるが故に逆流することなく  
乙血液 の全身を一週する時間は大約二十三秒時にして脈搏二十七回に相當す

### 第三 循環器の神経作用

心臟には神経節を有し自ら運動を主り他より運動を抑制する迷走神経と鼓舞する交感神経來りて其の運動を調節す而して調節中樞は髓髄に位す血管にも神経

を有し自ら運動を營み他より腦脊髓及び交感神経來りて運動を調節す其の中樞は髓髄及び脊髓に位す

### 附 淋巴及び其の流動

淋巴液は血液の毛細管より滲出して組織を營養したる殘餘と老廢分とよりなるものにして無色透明の中性液なり而して淋巴球と淋巴漿とよりなり更に淋巴漿は淋巴清と纖維素とよりなるものにして赤血球を除きたる血液と略々同様なり此の淋巴液にして腸壁の乳糜管に含むものは白色乳汁様なるを以て特に乳糜と云ふ而して淋巴管の淋巴液と通せしむる状態は靜脈の靜脈血と通せしむるに殆ど同一なれば茲に之を載せず又た淋巴球は白血球の前級細胞なり

## 第二章 消化生理

### 第一 食物

一營養質 此は身体の組織を形成し体力を發生する能力あるものにして蛋白質、脂肪、含水炭素(有機性)鹽類及び水(無機性)等なり



蛋白質は組織の主なる成分にして一部は組織を形成し一部は燃焼して体温及び運動の源となる

脂肪は一部は燃焼して体温及び運動を発生し一部は脂肪組織となりて臓器を保護する用をなす

含水炭素は燃焼して体温及び運動の源となるものにして澱粉砂糖等の類は之に属す

塩類は種類多くして組織を固くし腐敗せざる性を與へ或は老廢分の排泄を促す殊に食塩は大切なる作用を営むものなり

水は体重の凡そ十分七を占め重要なものにして養分の吸収も不養分の排泄も一として水の作用に依らざるものなし

二食物 は以上の營養質を含有し毫も毒性を有せざるものにして之に動物性及び植物性食物の二種あり甲に属するものは肉、乳汁、卵等にして蛋白質及び脂肪に富み乙に属するものは米、麥、豆、野菜等にして含水炭素に富む故に營養

は動物性食物に多きも人は植物性食物をも用ゐざれば生命を維持するこゝ能は

ざるなり而して日本人に適當なる食物の割合は動物性一に植物性四なりとす

三嗜好品 (贅澤食物)は營養質の含有量は甚だ僅少なれども適度に用ゐれば神經系を刺戟して食物の消化、血液の循環等を催進するの効あり酒、菘、茶、香料等之に属す

### 第二 食物の消化作用

攝取せる食物は消化管の運動と消化液とに由り粥の如く溶解し胃腸の壁より吸収し易きものとなす之を食物の消化と云ふ而して運動は食物を碎細し消化液を混じり且つ下方に輸送する作用を主り消化液は食物を溶解し種々の物質と爲すの作用を營む例へば齒にて食物を咀嚼するは運動にして唾液に由り澱粉を葡萄糖に變化するは消化液の作用なるが如し

一口腔の消化作用 は攝取したる食物を咀嚼し微細なるものとなし唾液を混じり舌の運動に由り嚥下す此時咽頭及び食管も漸次收縮して食物を胃に輸送す而して唾液中の唾液素に由り食物中の澱粉を葡萄糖に變化す此の作用は胃に至るも



食物と胃液と全く混合する迄は止むことなし  
 二胃の消化作用 は食物の粘膜を刺戟するに由り反射的に胃液を分泌し噴門及び幽門を閉鎖し二種の運動(廻旋摩擦運動蠕動)を起して食物と胃液とを攪拌し消化終れば幽門開きて食物を十二指腸に輸出す而して胃液中の胃液素に依り食物中の蛋白質をペプトンに變ず尙ほ胃液は殺菌力をも備ふ(胃には嘔吐と稱する病的運動あることを忘るべからず)食物の胃に滞在する時間は長くも五時間を普通とす

三腸の消化作用 は食物の粘膜を刺戟するに由り反射的に脾液腸液及び胆汁を分泌し且つ運動(蠕動 小腸には振子状運動もあり)を起して食物と脾液腸液胆汁を混合せしめ消化を營爲す即ち食物中の蛋白質をペプトンに變じ澱分を葡萄糖に變じ脂肪を脂肪酸とグリセリンに分解す而して此の消化作用は主に小腸に於て營むものにして大腸は小腸にて營養分を失ひたる食物の残渣より水分のみ吸収し漸次下方に送りて糞便となす此の糞便は胆汁の爲めに黄色を帯ぶ糞便の軟き時は腸の蠕動機亢進して排泄し硬き時は腹筋收縮して腹壁を亢め其

の排泄を補助す

腸に食物の滞在する時間は小腸に於て凡そ三時間、大腸は十二時間以上二十五時間なりとす

### 第三 胃腸の神経作用

胃腸は其の壁内に神経節ありて自ら運動を司り他より迷走神経來りて運動を催進し交感神経來りて抑制し以て運動を調節す而して眠睡せる間は胃腸の運動は休止するを常とす

## 第三章 呼吸生理

### 第一 呼吸の意義及び區別

呼吸とは身体の酸化作用に必要な酸素を攝取し酸化作用に由て生じたる炭酸を排泄するを云ふ而して之を外呼吸と内呼吸に區別す其の外呼吸は血液中の炭酸を体外に排泄し空氣中の酸素を血液に攝取するものにして肺臓及び皮膚



之を營爲し内呼吸は血液中の酸素を組織に附與し組織に生ずる炭酸を血液中に攝取するものにして全身毛細管に於て之を營爲す

### 第二 呼吸の作用

空氣の肺臓内に出入するは胸廓の運動に基くものにして肺臓は瓦斯の交換を主り氣道は只だ空氣の通ずる道路となるものなり

一胸廓の運動 胸廓は代るく縮張して肺臓内に空氣を出入せしむるものにして其擴張を吸息と云ひ收縮を呼息と云ふ而して平常の吸息は外助間筋と横隔膜の收縮に由る即ち外助間筋收縮して肋骨を上外方に舉上し横隔膜收縮して下降する爲め胸腔の内面に密接する肺臓は引かれて大さ及び長さを増し空氣を吸入するに至るものなり又た呼息は外助間筋及び横隔膜弛緩したる爲め胸廓並びに肺臓の弾力に依り故位に復して肺臓内の空氣を呼出せしむるものなり故に呼息の際には取て筋の作用を要せず然るに強き呼吸を營む場合は呼息吸息共に多くの筋の作用を要す

呼吸運動にして主に横隔膜の作用に因るものを腹式呼吸と云ひ助間筋の作用に因るものを胸式呼吸と名く男子の呼吸は腹式呼吸に属し女子の呼吸は胸式呼吸に属す

呼吸する空氣の量は一回の吸息にて大約五百立方仙迷を吸入し呼息の時は吸息に比して稍々多し又最も強く吸息をなして後、最も強く呼出したる空氣の分量を肺の活量と云ふ此の活量に由りて肺の容積を知ることを得るものにして壯年の男子は大約三千五百立方仙迷なり

呼吸の数は壯年の男子に於て一分間に凡そ十八回なり然れど體格、年齢、男女、安靜、動作等に由て増減するものにして例へば小兒は四十を算じ女子は二十を算じ運動は其の數を増し安靜は減するが如し  
呼吸運動の平常と異りたるものは咳嗽、嘔嚏、吃逆、欠伸、嘆息、努責、等にして反射的に起り又は精神的に起るものなり

二肺臓の作用 は酸素を攝取し炭酸を排泄する處の瓦斯の交換と体温及び水蒸氣の一部を排泄するものにして其の瓦斯交換の場處は肺胞と肺毛細管の間なり



即ち酸素は肺胞壁及び肺毛細管壁を滲透して血液に達し炭酸は同じく其の壁を滲透して血液より肺胞内に達するものごとす

三氣道の作用は空気の乾燥せるものを濕潤し寒冷なるものを温暖ならしめ不潔なるものを清潔にして肺臓に送るものなり特に鼻粘液には病原菌を撲滅する作用あり而して氣道の粘膜炎に附着したる不潔物は鼻涕及び痰と共に体外に排泄せらるるものなり

### 第三

呼吸器の神経作用

呼吸を營む神経中樞は髓に位し之より發する神経は脊髄神経を経て呼吸筋に分布し迷走神経を経て肺臓に分布す而して其の中樞は血液及び精神の刺激又は知覺神経の刺激等に由て常に興奮す

## 第四章

分泌及び吸收生理

### 第一

分泌物

分泌は組織より空洞又は体外に種々の液を出す作用にして其の分泌したる分泌物に種々あり

一唾液は唾液腺より分泌する無色粘稠の弱アルカリ性液にして水、蛋白質、鹽類及び唾液素等より成り、絶えず分泌すれども食物を攝取したる時に最も盛んに分泌す其の量は二十四時間中に大約一乃至二リットルなりと云ふ而して唾液の作用は澱粉を葡萄糖に變じ食物を柔軟ならしめ且つ泡沫を作りて胃腸に空氣を送る等なり

二胃液は胃液線より分泌する水様の強き酸性液にして水、胃液素及び鹽酸等より成り食物の刺激に由り反射的に分泌し精神の作用も其の分泌を催進す而して胃液の作用は蛋白質をペプトンに變じ且つ鹽酸の爲めに食物の異常酸酵及び腐敗を防ぐ等なり

三胆汁は肝臓より分泌する透明粘稠の強きアルカリ性液にして水鹽類及び種々の酸酵素より成り食物の刺激に由て反射的に分泌す作用は蛋白質をペプトンに變じ澱粉を葡萄糖に變じ脂肪を脂肪酸とグリセニンに變ず而して胃液は乾



酪質を凝固せしむるも脾液は消化す

四腸液 は腸液腺より分泌する無色アルカリ性液にして水蛋白質塩類及び種々の酵素より成り食物の刺戟に由て反射的に分泌す而して作用は脾液と略々同様なれども力は弱し故に副脾液の名あり

五胆汁 は肝臓より分泌する苦き黄色の液にして水、胆汁酸、胆色素等より成り絶へず分泌すれども平常は胆嚢内に溜溜し食物の腸を刺戟する時、反射的に胆嚢收縮して十二指腸に排泄す作用は脾液の作用を補助し粘膜を刺戟して腸の蠕動を旺め絨毛の吸収を促し又た食物の腐敗を防ぐと云ふ

六涙液 は涙腺より分泌する無色の液にして結膜の刺戟又は精神の感動等によつて分泌す作用は角膜の前面を洗滌し且つ滑澤ならしむ而して一部は蒸發し大部は鼻腔に達す

七皮脂 ば皮脂腺より分泌する半流動の液にして作用は皮膚毛髪を濕潤して柔軟滑澤ならしむ

八粘液 は粘液腺より分泌する無色アルカリ性液にして絶へず分泌す作用は粘

膜を濕潤して摩擦を減せしむるものなり

九乳汁 は乳腺より分泌する白色の液にして甘味を有し水乳糖蛋白質脂肪及び塩類等より成り作用は小兒を營養する無類の食品となる而して初めて分泌したる乳汁中に有する初乳球と稱するものは腸を刺戟して蠕動を起し便通を促すの効あり

十汗 は汗腺より分泌する臭と鹹味を有する液なり然れ其の量の少なき時は水蒸氣となりて眼に認むること能はざるなり作用は老廢物の排泄と同時に体温をも放散し体温調節を主るものなり而して夏期又は温浴等には其の量を増加し冬期或は冷浴等は其の量を減少す

十一尿 は腎臓より分泌する透明稍々黄色の酸性液にして臭と鹹味を有し水、尿素、尿酸、尿色素及び無機塩類等より成り二十四時間中に大約一リットル半を排泄す而して夏は其の量を減ずるも冬は増加す

尿の中に水分は糸毬狀血管より小体中に濾出し尿素尿酸等は曲細尿管壁より濾出し小体より流れ來る水分と合して直細尿管より腎竇に出で輸尿管を徑て膀



膀胱に達し充滿するに至れば括約筋弛緩し利尿筋收縮して尿を膀胱より尿道に排泄す尿道は又た收縮して遂に体外に排泄す而して利尿中樞は脊髓にあり  
 十二マイモーム氏液は眼瞼のマイモーム氏腺より分泌するものにして作用は眼瞼を濕潤して柔軟滑澤ならしむ此の液の凝固したるものは眼脂と云ふ  
 十三汀寧は外聽道を潤し微生物等の侵入したる場合には之を撲滅するの作用あり  
 以上の外分泌物には關節液胸膜液腹膜液の如き腔洞液及び筋液結締組織液の如き組織液等あり

第二 内分泌物

内分泌とは組織に於て形成したる分泌物を血液内に出すものにして此の分泌物をホルモンと稱す

一 甲状腺より分泌するものは身体に重要な作用あるものにして若し之を除けば神經麻痺、新陳代謝を害して身体衰弱に陥り發育停止するに至る

二 副腎より分泌するものは又た甲状腺の如く極めて大切なる作用を營むものなれば若し之を除けば血壓降り身体衰弱と死に至るべし彼の皮膚の青銅色に變ずる所謂アジソン氏病も副腎の病的變化に固くものなり

三 胸腺より分泌するものは甲状腺と略々同様の作用を營むと云ふ

四 下垂体より分泌するものは血壓の増減に關係あるものにして之を除けば甲状腺を除きたる時と同様の現象を呈す

五 脾臓より分泌するものは肝臓のクリコージェン製造に關與するものにして若し脾臓を除けば糖尿病を來す

六 睪丸より分泌するものは精神機能を亢奮して男子の特性を維持す故に睪丸を除けば色慾を失ふに至るべし

七 卵巢より分泌するものは女性を維持し春機發動を促し妊娠の生理を盛んならしむ

八 肝臓より分泌するものは腸内より血液中に吸収する毒物を再び腸内に排泄せしむる作用を營むと云ふ



九脾臟よりもホルモンを分泌す云云未だ定まりたる説なし

### 第三 吸 收

吸收とは物質を血液内に攝取する作用にして其の吸收の道路に二種あり一ツは淋巴管より血液中に入り一ツは直に毛細管壁より血液中に入るものなり而して身体の組織にして爪甲毛髪及び表皮等を除く他は何れの部分も吸收作用を営まざる處なし云云最も盛んなる器管は小腸にして胃大腸皮下結締織等に次ぐ近來汎く行はる、皮下注射又は靜脈注射等は此の吸收生理の理に基き行ふものなり

## 第五章 体温生理

### 第一 体 温

体温とは人体に固有する温熱にして腋窩に於て之を検すれば平均攝氏の檢温器にて三十六度五分を示す口腔腔及び直腸等にて計る時は腋窩より稍々高し之れ

体内と体外との差に由るものなり而して朝に低く夕に高く又た食餌を爲したる場合、運動したる場合は安靜空腹時等の場合に比して体温の昇騰するものなり

### 第二 体温の發生及び消散

一体温は組織の蛋白質脂肪含炭素等と酸素との酸化作用に由て發生し一部は内臓及び關節等の運動に由て發生す然れ運動に由て生ずる温は極めて少量なり安息時に於て壯年男子は二十四時間中に大約二千四百基瓦カロリーの温を發生す云ふ（一カロリーは蒸溜水一グラムを攝氏一度に温むる温量を云ふ）  
二斯くして發生したる温は寒冷なる空氣飲食物を暖むる爲めに消失し汗呼吸氣大小便等と共に放散し又た絶へず外氣衣服等に由て奪却せらる、ものなり

### 第三 体温の平均

体中にて爪甲毛髪表皮等を除く外總ての組織は皆、体温を發生すと云云腺及び筋肉殊に働かせる筋肉は最も盛んに温を發生す之に反して皮膚の如きは絶へず



盛んに温を放散す故に身体諸處の温度は甚しく高低の差あり然る血液は不斷体内を循環して高き部に至れば之を奪ひ低き部に至れば之を與へて諸處の温度を平均しつゝありて甚しき高低の差を見ざるなり

第四

体温の調節

体温は春夏秋冬常に略々一定せり此れ人体には自然に温度を調節する機能あるが故なり例へば夏は皮膚の血管擴張して盛んに温を放散し一方に於て食欲は衰へ運動を嫌ひて温の發生を減少す之に反して冬は皮膚の血管收縮して温の放散を減し一方に於て食欲大に進み運動を促して温の發生を増加するが如し又た家屋衣服等も体温の調節を補助するものなり  
以上述べたるが如く調節機能あるが故に温浴冷浴等に由て一時体温の昇降を來すところあるも直に常温に復するものなり然るに病的に温度の上昇したるものは容易に下降するところなし之を稱して熱と云ふ

第六章

運動生理

体内には白血球結締細胞精虫及び茸毛細胞等運動するもの種々あれども筋肉を以て運動の最も完全なるものとす

第一

筋肉

一筋は自然に收縮すべき性を備へ常に腦脊髄及び神經節より刺戟を受けて收縮し身体の運動を營爲す而して筋の刺戟を受けて收縮する状態を亢奮と云ひ收縮すべき性を亢奮性と云ふ刺戟には器械的温熱的化學的電氣的の別あれども詳しきは次の神經生理に譲る

二筋の成分は水蛋白質脂肪葡萄糖無機鹽類筋肉素等にして死亡したる筋の強直(コワバル)するは筋肉素の凝固するに由るものなり

三筋の亢奮性を維持するには安息と動作の交代、新鮮なる血液の循環及び中樞神經との連絡あるを要す故に筋の動作を持続すれば遂に疲勞に陥り安息を持続すれば遂に萎縮に陥る又た筋に循る血液を斷つも中樞神經との連絡を斷つも遂に麻痺に陥るべし



第二 音聲及び言語

音聲は喉頭の聲門帶緊張し空氣の聲門を通ずる際聲門帶を振動するに由て發す而して其の上下の諸腔（胸咽頭等）共鳴して完全なる音聲となるものなり又た此の音聲を言語となすは口腔及び鼻腔の各部作用して成るものなり例へばアイウエオを發するに口腔の種々と變形するが如し

第七章 神經生理

第一 神經の機能

神經は恰も電話線の如く刺戟を彼此傳導するものにして末梢に受けたる刺戟を中樞に傳搬するものを求心性神經と云ひ中樞に起る刺戟を末梢に傳搬するものを遠心性神經と云ひ中樞と中樞を連絡して刺戟を傳るものを中心間神經と云ふ而して知覺神經の如きは求心性神經に屬し運動分泌神經の如きは遠心性神經に屬す

第二 神經の刺戟物

反射作用は求心性神經に受けたる刺戟を中樞に傳達し中心間神經を徑て遠心性神經に傳搬する現象を云ふものなり例へば眼の結膜を刺戟すれば其の刺戟は髓髄の涙液分泌中樞に達して涙液を分泌するが如し

刺戟とは神經の安息せる状態より動作の状態に移らむるものにして意識刺戟の外に左の四種あり

- 一 器械的刺戟 之は壓迫牽引等の刺戟にして按摩鍼の如きものなり
  - 二 化學的刺戟 之は藥品食品等の刺戟にして健胃劑酒等の如きものなり
  - 三 溫度的刺戟 之は冷熱の刺戟にして灸温石濕布の如きものなり
  - 四 電氣的刺戟 之は電流に由て刺戟するものにして一般人の知るものなり
- 而して神經の刺戟に應じて作用する時は之を興奮と云ひ興奮する性を興奮性と云ふ



### 第三 神經中樞

神經中樞は自然に興奮し或は知覺神經より刺戟を受けて興奮し運動分泌及び制止等の作用を営むものなり

一 脊髓の作用 は末梢に受けたる刺戟を大脳に傳へ大脳より來る刺戟を末梢に傳搬するものにして神經纖維(運動)の大部分は髓髓の部に於て左右相交又するが故に大脳右半球に起る刺戟は身体左半部に及び左半球に起る刺戟は右半部に及び左半球に及ぶものとす又た脊髓は刺戟の媒介を爲すの外左の反射中樞を有す瞳孔開大血管運動、發汗、脱糞、利尿、分娩(女子)射精(男子)等を主る中樞  
反射中樞は求心性神經より刺戟を受けたる時精神の命令を俟ずして直に遠心性神經に刺戟を送り作用を起さしむるものを云ふ

二 髓髓の作用 は脊髓より來る刺戟を大脳に傳へ大脳に起る刺戟を脊髓に傳ふる刺戟傳導を營む外左の反射中樞を備ふ即ち呼吸、循環、咀嚼、嚥下、眼瞼閉鎖、嘔吐、咳嗽、噴嚏、發汗、胃腸運動、唾液及び涙液分泌等を司る中樞

三 小腦の作用 小腦は身体の運動を調節して体の平均を保たしめ且つ諸筋の共同運動を營爲せしむる云ふ

四 大腦の作用 大脳は最も高等なる神經中樞にして精神機能を顯はすの外五官機能の中樞言語中樞運動及び体温調節中樞等を舍す而して精神は喜怒哀樂より知覺記憶慾望等の總稱なり

睡眠、大腦の機能休止する時は前記の作用は顯はれず此の状を睡眠と云ふ而して睡眠は大腦細胞の疲勞に因す

### 第八章 五官生理

五官器には知覺神經分布して各々特異の作用を営むものなり

一 皮膚 は身体を被包して内部を保護し觸れたるものを知覺し汗を分泌して老廢物を排泄し且つ温を放散して体温の調節を司り僅かに呼吸をも營む而して知覺には觸れたるもの、部位、寒暖、硬軟、形狀を知る所謂部位神温神壓神觸神の別あり其他痛疼及び瘙癢を感ず



二眼 は光線の媒介に由て物を視るものにして其の光線は先づ角膜瞳孔水晶体及び硝子体を通じて網膜の明視點に達し視神經を刺戟す視神經は其の刺戟を大脳の視覚中樞に傳達し物の辨別をなすものなり而して瞳孔は光線の強弱に従ひ自由に縮張し水晶体は厚度を増減して光線を明視點に達せしむ之を眼の調節機能と云ふ又眼瞼及び睫毛は眼球を保護するものなり

三耳 は音響を知覺するものにして物体の振動に由て生じたる音波は先づ鼓膜を振はす此時鼓膜の内面に接する聽骨も振動して内耳に含有する液に波動を生じしむれば其の波動は聽神經を興奮せしむ聽神經は刺戟を大脳の聽覚中樞に傳達し音響を辨別するものなり

四舌 は味覺を主るものにして前部は主に甘味酸味を感じ後部は主に鹹味苦味を感じす而して辛澁は筋の收縮に属する筋覺なりと云ふ尚ほ味覺するには總て液体なるを要す

五鼻 は空氣と共に吸入したる香臭分子の刺戟を嗅神經に由て大脳の嗅覚中樞に傳達し以て香臭を辨別するものなり

以上の五管神經は刺戟を大脳の各中樞に傳へ中樞に於て辨別を爲す理なるも實際は刺戟を受けたる五管器に於て知覺するものにして之を感覺の末梢轉移と稱す感覺には五管感覺の外疼痛癢痒快美不快飢餓及び口渴等の如き普通感覺あり其の疼痛は刺戟の強弱時に起り輕き時には癢痒を感じ快美は身体の諸作用調和せる時に起り調和破れたる時は不快を感じ飢餓は胃中の空虚となり胃壁互に摩擦する場合に起る感覺にして口渴は水分の不足せる血液の軟口蓋を刺戟するに由て起る感覺なりと云ふ

### 第九章 生殖生理

人は一定の時出生して死滅するものなれども子孫を殖す生殖機能あるが故に滅じることなくして益々蕃殖するものなり

一精液 は濁りたるアルカリ性液にして内に精虫を有す、睪丸より分泌して精囊に溜溜し射精の際には攝護液及びカウベル氏液等と混じて体外に排泄せらるゝものなり



二卵 は春機發動期（十四五歲頃）に達すれば夫より四週毎に一回卵巢より分泌せらるるものにして其の分泌したる卵は輸卵管を経て子宮内に達す  
 三月經 は卵の分泌期に現るるものにして分泌期には卵巢のみならずして子宮にも甚しく充血を起し其の結果子宮粘膜炎より出血して流出するものなり而して月經は二日乃至八日間現はれ其の量は五十乃至百瓦なり大抵四十五歲前後に至れば月經は閉止するものごとす

四受胎 とは交接に由て出でたる精虫が子宮内に上行し更に進んで輸卵管に達し此處に逍遙せる卵に會合して胎兒の基礎を成すを云ふ通常は妊娠したりとも云ふ

五卵の發育 受胎せる卵の下りて子宮の粘膜炎に附着すれば其の周圍の粘膜炎は次第に隆起して遂に卵を被包するに至る被包せられたる卵は漸次分裂して更に二枚の膜（絨毛膜及び羊膜）を生じ中に胎兒を完成す其の日數は二百八十日（一ヶ月ヲ二十八日トシテ滿十ヶ月）にして分娩するに至る  
 胎兒は一ヶ月の終りに於ては身長僅かに三分三厘位なるも十ヶ月末には身長一

尺五寸餘、体重八百匁となる又子宮は三ヶ月末には骨盤内を充し五ヶ月末には臍下に達し八月末には臍と胸骨劍尖の中央に達し九ヶ月末には心窩に達す此の時の子宮は平常の凡る五百倍となる

五妊娠の徴候 月經閉止し乳頭黒色を帯び子宮の膨大したる等にて妊娠なりと云ふは誤り多し而して確實なる徴候は臍帶雜音及び心音を聴取し胎兒の移動を知るにあり之らは五ヶ月以後に現はるるものごとす

新陳代謝

吾人は常に体外より營養分を攝取し自體組織を營養して諸般の生理的機能を營爲し其の結果生じたる老廢分は再び体外に排泄す此の新しき物質と陳き物質との代る機能を稱して新陳代謝と云ふ而して此の新陳代謝の平均せる時は健全なれども若し何かの原因に由て平均を失ふ時は健康を損するに至る之を疾病と云ふ故に吾人の身体も國家の經濟と同じく出入の平均を維持せざるべからず



# 第三編 鍼灸學

## 第一章 鍼治學

### 第一 鍼治の意義

鍼治とは一定の法式に従ひ鍼を組織に刺入し器械的に筋神經を刺戟して疾病を治癒せしむる處の理學的療法なり

### 第二 鍼

一 鍼の材料 住時は鍼を製するに石竹鐵等を用ゐるも近時は専ら金銀を以てし稀に鐵を以て製するものあるのみ此れ金銀は鐵に比し質、柔軟緻密にして彈力に富み錆を生ずること少ければなり  
但し鍼柄は眞鍮、金、銀、銅、鐵等種々なる金屬を以て製せらる  
二 鍼の各部 鍼は其の撮む處を鍼柄（龍頭）と云ひ組織に刺入する部を鍼身（穂）と云ひ尖りたる部を鍼尖（穂尖）と云ふ而して鍼柄及び鍼尖の形狀には種

々あり例へば鍼柄の俵軸トクサ軸、鍼尖の松尖或は杉尖に於けるが如し  
ハ 鍼の種類 最初鍼には長鍼、大鍼、提鍼、鉞鍼、鋒鍼、圓鍼、員刺鍼、鑿鍼及び毫鍼の九種あり之を九鍼と稱し多くは瀉血或は排膿等外科的に使用したり近時鍼治家の使用するものは毫鍼にして稀に員刺鍼を用ゐるものあるのみなり  
ニ 毫鍼の細大長短 鍼は通常一番乃至十番に分ち其の番を追て大を増す（關西地方には番を追て大を減ずる處あり）而して三浦博士の測定したる處に依れば鍼身の中央に於て一二三番は〇、一五ミリメートル四五番は〇、二ミリメートル六番は〇、二五ミリメートル七八番は〇、二五三ミリメートル九番は〇、四ミリメートル十番は〇、四五ミリメートルなり又長さは一寸乃至五寸にして通常は三番乃至五番の一寸六分或は二寸鍼を使用す

### 第三 刺 鍼

一 刺鍼の法 鍼の刺方に種々あれども管鍼法撚鍼法及び打鍼法の三法を基礎とし其の他は之より分れたるものなり



管鍼法は鍼を容れたる管を押手（左手）の拇指と示指との間に挿みて皮膚に當て其の管の上端より二三寸顯はれたる鍼柄を刺手（右手）の示指にて彈き込み（穿皮術云ふ）後、管を除き夫より刺手と押手と共に働かして撚り込む法なり  
 撚鍼法は押手にて鍼身を皮膚上に保持し刺手にて撚り込む法なり  
 打鍼法は押手にて鍼身を皮膚上に保持し刺手にて槌を持ち之にて叩き込む法なり  
 近時打鍼を行ふ者は極めて稀にして管鍼に依るもの最も多く撚鍼に依るもの之に次ぐ而して何れの法を問はず鍼を組織に刺入する時は其の方向に由り直鍼斜鍼或ひは横鍼の名稱を附す

二鍼の除刺除抜 鍼を組織に刺す時は必ず多少の組織を損傷するものなれば病の種類、症状の程度に従ひ一様ならざれども概して細鍼を用ゐ徐ろに刺し又た徐ろに抜くを良とす大鍼を粗暴に刺す時は甚しく組織を損し一部の筋神経に痺を來すことあり三浦博士の報ずる處に依れば一番乃至三番を刺す時は筋纖維なれば十本より二十本又神經纖維なれば十本乃至二十本を切斷すこと云ふ  
 三鍼の手技 差入たる鍼は其の儘になし置くこと少なくして或は旋し或ひは振

はし或ひは又た抜き刺して筋神経を刺戟す之を鍼の手技と云ふ而して此の時、其の部又は遠隔の部まで一種レウマチス様の疼痛を感じることを多し之を鍼の感通（感應）又は俗に響とも云ふ

四鍼の術式 此は手技を行ふ方法にして人に由り區別一様ならざれども茲には次の五種をなす即ち刺入たる儘抜くものを單刺術と云ひ刺入して後、振はするものを振顛術と云ひ刺入して後、鍼尖を諸方に轉ずるものを亂刺術と云ひ組織中にて抜き刺しするものを雀喙術と云ひ刺して暫らく留むるものを置刺術と云ふ而して病の種類及び症状の如何に由て術式を選り用するものにして例へば痲痺には亂刺術を行ひ神經痛に置刺術を行ふが如し

五鍼痕 鍼を抜たを後に無色或は赤色の隆起又は單に赤點を生ずることあり之を鍼痕と云ふ而して無色のものは漿液の凝固したるものにして赤色のものは小血管より出血したるものなり又た赤點は毛細管より出血し組織に浸潤したるものにして何れも消毒の不充分なるか或ひは技術の未熟なるに由るものなり然れ此の鍼痕は數時間、長くも二三日を徑れば消失するものにして敢て憂ふるに足



らす其の部を二三分間輕擦すれば消失一層速かなり

六 拔ざる鍼の處置 刺たる鍼の時こして抜け難きことあり之れ筋の急に收縮して鍼身を壓迫する爲め（稀には鍼身の屈曲するに由ることあれども）なれば斯る際には近傍に新たに刺鍼すれば最初の筋は弛緩して容易に抜鍼し得るに至るを以て之を抜き然る後、後に刺したる鍼を抜去ると良法なりとす

七 折込たる鍼の處置 鍼の折込たる場合は躊躇することなく靜かに其の部を檢して少しにても折端の皮膚上に顯はれ居る時は毛抜を以て抜き取り若く深く隠れたる場合は軽く按撫し置かば二三日間該部に輕き疼痛を感じるのみにて後害を残すことなきは古來の經驗に由て明かなりと雖も實際は外科醫に委しても拔取るを鍼家の患者に對する道とす而して折込たる鍼の結果に付ては体温又は体内化學的成分の爲めに消滅すこと云ひ筋の運動に由り移動して或は脱出し或は又た永久其部に留まること云ひ諸説一様ならざれども余は實驗上移動説に賛同するものなり

八 刺戟の度 鍼の刺戟は素より患者の嗜好嫌忌體格體質男女年齢病の種類及び

輕重に由て一様ならざれども第一患者の快感を覺ゆるの度を以て適度とす決して不快疼痛等と感ぜしむべからず

九 刺鍼を注意すべき部位、腦脊髓、鼓膜、眼球、肺臟、心臟、心臓、睪丸、腹膜及び血管神經の主幹腱等は危險を招くこと多きを以て顛門殊に小兒の顛門項窩前頸部胸廓の周圍腹部四肢の屈曲側等は最も注意して刺鍼すべし然るに鍼の危險は元來部位に依らずして淺刺深刺に由るものなれば初學者は成べく淺刺を守り技術の熟達したる曉にあらざれば深刺は爲さざるを良とす

### 第四 鍼の生理的作用

鍼を身體に刺す時は器械的に神經を刺戟し直接及び反射的に諸般の機能を催進若くは制止す概して輕き刺戟は機能を促進し強き刺戟は機能を制止し過度の刺戟は痲痺の状態に陥らしむるもの、如し故に時間の長短、刺戟の強弱等に由て機能を調節するものとす（三浦博士の報する處に依れば鍼には一種の痲醉作用ありと云ふ）



鍼治の作用は其の目的に由て興奮、鎮靜、誘導の三種に區別す

興奮作用は直接又は間接に神経を刺戟して諸器官の機能を催進するものにして例へば便秘症に對し腸を刺戟し蠕動を興して便通を促すが如し

鎮靜作用は激しき刺戟又は持續的刺戟を與へて亢進したる機能を沈靜し或は

内臓機能の亢進したるものに對しては制止神経を興奮せしめて機能を沈むるが

如きものにして例へば齒痛に對し局部に刺戟を與へて鎮痛せしむるが如し

誘導作用は刺戟に由り先づ其の部の血管を收縮せしめ次で擴張せしめ他部の

血液を其部に導くものにして例へば腦充血に對し下肢に刺戟して頭部の血液を

下肢に誘導し症状を輕快せしむるが如し

鍼治の目的は誘導法制止法興奮法として説き或は誘導法局部療法及び交感神経手術（内臓手術）として説くものもあるなり

第五 鍼の禁忌及び適應症

一 禁忌症 は傳染病殊に急性傳染病、出血素因あるもの（血友病紫班病等）急

性炎、皮膚病、腫瘍（癌腫肉腫等）膿瘍、壞疽、寄生蟲、變性、肥大其他劇しき熱ある場合なり然れ以上之の病症に對して絕對に禁鍼すべしと斷言するにあらず只害を招くことあるも効を奏する場合少なきを以て掲げたるものなり炎症の如きは誘導の目的を以て他部に刺戟すれば著しき効あるものごとす  
二 適應症 は禁忌症を除く外總てのものなれども就中筋、神経病、胃腸病、局虛充血及び貧血其他一般内臓の機能的疾患並びに諸病の回復期等には著しき効あるものごとす

第六 施術に臨みての心得

先づ病を診察し適應症を認めたる時は術者及び患者共に適當なる位置を占め消毒を爲し鍼の良否を檢して故障なきものを選び慎重の態度を以て精神は専ら患者に傾注し押手を用ゐる施術部を二三分間按摩して經戟に馴しめ後、徐ろに刺戟すべし

第二章 灸 治 學



第一 灸治の意義

灸治とは一定の法式に従ひ艾（藥或は器械を用ゐるものもあり）を皮膚上に點じ之を燃焼して其の温熱に由り神經を刺戟して疾病を治療する處の理學的療法なり

第二 艾

艾は蓬葉を日陰にて乾燥し晒して精製したるものにして之に切艾及び散艾の二種あり（近來は藥艾もあるなり）而して通常は切艾を使用し最も大灸或ひは小灸には散艾を使用す又た切艾は普通大中小の區別ありて其の長、大及び重を檉田醫學士の報ずる處に依り掲ぐれば次の如し

	長	直徑	重量	燃焼温度(大凡)	
大	六ミリメートル	三ミリメートル	七、二五	ミリガラム	一三〇度
中	五同	二、五同	三、六五	同	一〇〇同
小	四同	二同	二、〇	同	六〇一同

尙ほ艾に點火すれば六百四十度の熱を發し之に風を送れば六百七十度迄發熱すと云ふ家兎に付て巨大艾柱より發する熱の組織に深達する程度を計りしに通常皮下二、三センチメートルにして二、七センチメートルまで達すと云ふ

第三 灸の種類

灸には有痕灸と無痕灸の別ありて甲は皮膚に癍痕を残すものにして艾灸の他に水灸漆灸油灸等種々あり乙は癍痕を残さざるものにして一名温灸とも云ふ布又は紙の如きものを隔て熱を送り或は器械等を用ゐて暖むるものにして紅灸味噌灸蒸灸及び押灸等之に屬す以上述べたるが如く灸には多くの種類あれども古き歴史を有し汎く應用せらるゝものは艾灸なるが故に茲には主として艾灸に付き述べむとす

第四 灸痕

艾灸は皮膚に人工的火傷を起さむるものにして三度に區別す其の第一度は充



血して灼熱を感じる發赤期を云ひ第二度は滲出物を出す水胞期と云ひ第三度は組織の壞死に陥る炭化期を云ふ而して之等は灸の大小、灸火の強弱及び壯數の多少に由て生ずるものなり概して灸は其の部の組織を破壊し知覺脱失を來すものなれば無痕灸は微菌の侵入門（灸創）を造らず醜痕を残さず組織を破壊せざる特點を有すと賞用するもの漸次増加しつつあり

第五 灸の生理的作用

施灸すれば温熱的刺戟に由て知覺神經を刺戟し反射的に諸器官の機能を催進或ひは鎮靜して調節す而して鍼の丈下に述べたる如く輕き刺戟は機能を促し強き刺戟又は持續的刺戟は機能を減弱し過度若くは最も持續せる刺戟は痲痺の状態に移行せしむ又た灸を施せば白血球増加す云ふ

○灸治の作用は目的に由り興奮作用鎮靜作用及び誘導作用の三作用をなす又た人に由ては患部に施すものを局處作用と云ひ遠隔せる部より患部に刺戟を送るものを反射作用と云ひ之に誘導作用を加へて三作用をなすものあり灸治も鍼治

と共に施術に近き部分に最も能く作用を及ぼすものとす灸治の作用は鍼と略ぼ同様なれば鍼治作用の部を参照すべし

第六 禁忌及び適應症

甲 傳染病殊に急性傳染病、腫瘍、膿瘍、壞疽、血友病紫班病、急性炎症部、創傷部、皮膚病、變性、肥大、熱性症其他高度の衰弱又は全身状態の險惡なる場合等は成るべく禁ずるを良とす

乙 灸の適應症は甚だ多きも就中筋神經の諸病、慢性炎、胃腸病、肺病、脚氣、局處充血及び貧血等には特異の効あり元來の灸の作用及び適應禁忌症等は鍼と殆んど同一なりと雖も鍼は鎮靜作用強く灸は興奮作用強くして慢性疾患に著効あるもの、如し

第七 禁灸の部位並に施灸の注意

灸は鍼と異り皮膚上より刺戟するものなれば禁ずべき部位は眼球のみと言ひ得



へきも醜痕を留るものなれば顔面頸部等は成べく禁ずるを良しす。縦令其の他の部と雖も多く据へるは身体之美を損ずるものなるが故に術者は病を精査し施術點を撰び徒らに灸點を増加せざる様注意すべし。

灸の大小壯數は男女年齢體格體質患者の好忌病の種類及び輕重等に從ひ宜しく斟酌して施すべし。一説に一點十壯は興奮法の目的に適ひ五十壯以上は鎮靜法の目的に適ふと云ふ。

### 第八 施灸時の心得

施灸は寒冷、風等を避けたる場所にて慎重の態度を以て行ひ出來得べくは手指及び施灸部を消毒して行ふべし。一灸は燒却消毒の効あれば藥物を以て消毒するに及ばずと言ふは誤りなり。而して患者に施灸の前後は安靜を守り局部を清潔にし灸痕を摩擦し或ひは搔等せらる様注意すべし。若し灸痕の化膿したる場合は消毒液（皮膚消毒液の度）にて洗滌するか又は消毒液を浸したるガーゼにて拭ひ、後に殺菌瓦設を當て其の上に絆創膏を以て十字帶を施し置くべし。

## 第三章 消毒法大意

### 第一 鍼灸術と消毒

凡そ傳染病は二三のものを除くの外は總て細菌の人体に寄生して發するものなり。此の細菌は水、空氣及び地中に存し其他衣服又は飲食物等すべての物に附着し居りて吾人を侵さむとす。あるもの、如し然ごも人の皮膚粘膜の表皮は細菌に抵抗する性あるが故に縱令皮膚に附着するも或ひは空氣飲食物に由て体内に進入するも容易に組織に寄生すること能はずして遂に驅除せらるゝに至る。然るに若し何かの原因に由て皮膚粘膜に損傷を蒙る時は細菌は忽ち此處より侵入して驚くべき病症を惹起するに至る（發病は尙ほ組織の抵抗力如何に關す）而して化膿菌は素より丹毒菌破傷風菌の如きは好んで皮膚の傷口より侵入するものなれば鍼灸家は最も嚴重なる消毒を爲ざるべからず如何となれば斯業者は種々なる患者に接し傳染病の媒介者となることあるのみならず鍼灸術を以て皮膚を破り細菌の侵入門を形成するものにして殊に不潔なる鍼を其のまゝ刺す時は



恰も種痘に於けるが如く病毒を移植するの虞れあればなり

## 第二 細菌の性状及び作用

微菌とは最も下等の植物にして茸、黴及びバクテリアの類を云ふ而してバクテリアは顯微鏡に依らざれば視ること能はざる小体なれば特に細菌と稱す彼の恐るべき傳染病の原因は殆んど此の細菌なり、總て細菌は單一の植物性細胞にして原形質より成り被膜を被る中には芽胞（果物の種子の如きもの）を有するものあり大きさは大約一ミクロン（一寸の凡ろ三萬分一）なり之を形狀に由て大別すれば球菌、桿菌及び螺旋菌の三種とす其の蕃殖は先づ發育すれば中央に締切の如き溝を生じ之より分裂して二個となり更に前と同様の順序を以て二個は四個、四個は八個となりて増加す蕃殖時間の速なるものにおいて僅々二三十分間に於て一回の分裂をなす、されど發育中に種々の障害を受け實際は細菌本來の蕃殖力を逞ふすること能はざる場合多し例へば冷熱、乾燥、光線及び消毒薬の影響を蒙るが如し消毒法とは畢竟この理を應用したるものなり而して細菌の

生活を補助するものは充分なる水分、適度の温度（病原菌は三十七度非病原菌は三十度内外）及び養分なりとす

細菌の作用は人体に全く無害なるものあり消化を補助するものあり傳染病を發するものあり又た死物に寄生して腐敗を起すものあるが故に之を作用に由て病原菌と非病原菌に區別することを得、而して細菌の人体に害をなすは細菌より分泌する毒素の中毒なりとす

## 第三 消毒法

消毒とは傳染病の原因たる病毒（細菌及び原虫）を豫防殺滅するの意にして之を行ふ消毒法を理學的及び化學的の二種に大別す

一理學的消毒法とは日光に照し或ひは煮沸し乾燥するの類にして次の如し  
 一燒却消毒は燒く法にして消毒の效果極めて確實なれども値ひ安きものにあらずれば施し難し此の法に類するものなるが往昔鍼を火燄中に通せしめつゝありしと云ふも實際鍼の消毒には適せざるなり



○蒸氣消毒は攝氏百度以上の流通蒸氣にて消毒するものにして近時輕便なる滅菌消毒器現はれおれり

ハ煮沸消毒は攝氏百度以上の熱湯にて煮沸するものにして滅菌の消毒に適すこ雖も皮膚消毒には五十度以内のものならざるべからず

二日光消毒は消毒すべき物品を日光に當て乾燥するものにしてチブス菌の如きも僅かに一時間餘にて死滅すと云ふ

ホ摩擦消毒は物を拭ひ或ひは洗濯するの類にして器械的消毒法とも稱し極めて不完全なる消毒法なり

二化學的消毒法とは即ち藥物消毒法にして藥品に種々あれども吾人の多く使用するものはアルコール 石炭酸 リソール 昇汞等なり

アルコールは無色透明にして刺すが如き香氣と僅かに甘味を備ふる液なり之に無水含水の二種ありて無水アルコールは純アルコールとも稱し消毒の効なし然るに含水アルコールは酒精とも稱し約六十分の水を含有し消毒の効力強大なり故に其儘使用す

○石炭酸は無色針狀の結晶にして臭氣と灼くが如き味を備へ長く貯藏し置きたるものは溶解して赤色を呈す石炭酸は物を腐蝕するの性ありて危険なれば注意すべし而して石炭酸水を造るには先づ暖めて溶解せしめ純藥九分に水一分を和し溶解石炭酸を製しとくをよしとす

ハリゾールは黃褐色にして強き臭氣ある粘滑の液体なり而して此液の六七十倍のものは麥酒色を帯び百倍内外のものは透明にして百五十倍乃至二百倍のものは白色となるが故に色に由て略々其の稀釋度を知り得べし

ニ昇汞は白色の結晶なり之を藥液となすには等分の食鹽を混じ温湯に入れて能く盪振るべし而して此ものは水と見誤り易きが故に通常赤色を附して使用す又た昇汞は金屬を腐蝕する性あるが故に滅菌の消毒に適せず

#### 第四 消毒藥の稀釋度

滅菌の消毒には石炭酸二十倍 リソール二十倍 酒精とし皮膚消毒には石炭酸五十倍 リソール百倍 昇汞千倍 酒精とす而して消毒藥を稀釋するには百倍な



れば純藥液一分に水九十九分を合し二十倍なれば純藥液一分に水十九分を合するが如くすべし  
消毒藥の中には日光或ひは空氣に觸れば性質を變ずるものあれば容器の蓋を嚴にし暗處に置くを良し又た普通の水の性質を變ずる憂ひあれば成べく蒸溜水を以て製すべし

### 第五 實地消毒の順序

- 一 鍼及び鍼管を消毒液中に投ず
- 二 爪刷毛及び石鹼を用ひ清水又は温湯にて手指を洗滌す特に爪の間、皺襞の間に注意を拂ふべし
- 三 斯くして洗滌したる手指は乾燥せるガーゼにて拭ふ
- 四 拭ひたる手指は更に消毒液にて洗滌するか或ひは消毒液を浸したる瓦設片にて拭ふ
- 五 消毒液を浸したるガーゼにて施術部を拭ふ

- 六 斯くして後、刺鍼す
- 七 斯術終はれば又た前の如く手指の消毒をなすべし
- 八 從來の徑驗に由て見るに實際斯くの如く複雑なる消毒をなすに及ばず雖も正式に行ふは安全の策なりとす

## 第四編 治療學

### 緒論

一 疾病は新陳代謝に異常を來し組織の造構及び官能に變化を生じたるものにして之を種々の方面より觀て次の如く區別す即ち生る時に父又は母より傳へられたるものを遺傳病、母体にあるとき既に發したるものを先天病、生れて後に發するものを後天病、微菌等の寄生して發するものを傳染病、組織に變化あるものを器質病、組織に變化なくして働きに變化あるものを官能病、初めて發するものを原發病、一病あり之に續ひて發するものを續發病、容態劇しくして多



くは熱を伴ひ日數短かきものを急性病、容態劇しからずして日數長きものを慢性病、急性と慢性の中間にあるものを亞急性と云ふ又た病の回復或ひは死の終局を轉歸と云ひ病の經過及び轉歸を豫言するを豫後と云ふ

二病原とは病の發生する源にして必ず二種あり即ち素因(内因)誘因(外因)之なり此の兩者相合して發病するものなれば如何なる場合に於ても單に一因のみにては決して發病するものにあらず而して素因とは自ら先天的或ひは後天的に有するものにして必竟病に侵され易き體質を云ふ遺傳、男女、年齢、体格、體質、營養の良否等みな之に屬す又た誘因とは外より來るものにして外傷、中毒、寒暑、土地、家屋、衣服、飲食物、職業、習慣、貧富、寄生物、精神の感動等之に屬す

三病の治癒する途に二種あり一を自然療法と云ひ一を人工療法(醫療)と云ふ凡て生活体の組織は不足を生ずれば之を補ひ過剩を來せば之を減じて常態を維持するの能力あり故に病は捨て置くも自然に回復するものなり之を自然療法と云ふ然ともたゞ自然に任かするのみにては回復速かならざれば人為的に之を補

助す之すなはち醫療なり故に病ひは自然に治癒するものにして醫療はたゞ自然療能を補助するに過ぎざるのみなり而して醫療には理學的療法と化學的療法の二種(別に心理的療法もあり)あり更に理學的療法を器械的温度的電氣的の三種に分つ按摩鍼術の如きは器械的療法に屬し灸治の如きは温度的療法に屬す又た治療の目的に依て原因療法對症療法及び攝養療法の三種となす即ち甲は病原を除きては症候を治め丙は体力を養ふを以て主眼とす例へば肺癆患者に對し結核菌を撲滅せんとするは原因療法にして解熱を圖り咳嗽を鎮むるが如きは對症療法なり尙ほ空氣日光等に浴し滋養を攝るは攝養療法なるが如し

### 第一章 消化器病の療法

#### 一 耳下腺炎

原因は口腔炎傳染病等にして流行性は春秋に多く發し原因不明なり  
症候は耳下腺腫張して疼痛を發し咀嚼困難なる又た化膿することあり豫後良



療法は刺戟を避け奄法を施し頸部（風池天窓）肩部（肩井）に鍼灸すへし

二 咽頭加答兒

原因は寒胃傳染病種々の刺戟にして慢性は心臓肺臓病等よりも來る  
症候は咽頭粘膜炎腫脹赤し疼痛あり嚥下の際は疼痛増加す豫後概ね良なり  
療法は刺戟性飲食物を避け頸部（風池扶突水突）肩部（肩井）に鍼灸すへし

三 急性胃加答兒

原因は暴飲過食不良食物急性傳染病及び外傷等なり  
症候は食欲缺亡胃部壓重口渴を訴へ吞酸嘈嘔氣嘔吐胃痛を發す豫後良  
療法は停滯物あれば吐出せしめ絶色安靜胃部の溫濕布を命し鍼灸は上腹部（巨  
關幽門不容）左季肋部（期門）中腹部（天樞）背部（肝俞胆俞）に施すへし

四 慢性胃加答兒

原因は酒蕘の過用食餌時刻の不正貧血肝臟心臓肺臓病等なり  
症候は食欲缺亡或は亢進胃部膨満食後の胃痛吞酸嘈嘔氣あり身体衰弱す  
療法は食物を能く咀嚼し飲料を節し按腹を行ひ鍼灸は前者と同處に施すべし

五 胃擴張

原因は幽門癌及び癥痕暴食慢性胃加答兒等なり  
症候は胃部膨満不快を感じ吞酸嘈嘔氣稀には嘔吐あり振水音（チャブンク）  
を發す夜間に至れば胃痛を訴ふ重症は胃の下界臍下二指横徑に達す  
療法は食餌時刻を定め飲料を節し咀嚼を叮嚀にし按腹を施し鍼灸は前處に同じ

六 胃痙（胃痛）

原因は胃カタル脊髄癆生殖器病貧血ヒステリー神經衰弱等なり  
症候は心窩に發作性劇痛を發し顔色蒼白となり冷汗を流し人事不省に陥ること  
多し而して心窩を強壓すれば疼痛輕快す又た暖氣あり豫後良なり



◎法は原因を除き按腹を施し背部（九乃至十二胸椎の兩側）に強壓を加へ胃部の温包は著効あり鍼灸は前處の外なほ下腿（三里三陰交）に施し胃部は淺刺に留め餘り刺戟せざるを良とす

七 神經性嘔吐

原因は腦脊髓病妊娠神經衰弱ヒステリ肝腎胃腸子宮病等なり  
症候は嘔心なくして頻りに嘔吐を發す豫後は良なれども原因に依て危險なり  
療法は患者を慰藉し固形食を攝らしめ按腹して臍部（天樞）下腹部（中極）等に鍼灸を施すべし胃部の刺戟は却て害あり

八 胃潰瘍

原因は粘膜の一部胃酸の爲めに消化せらるゝものにして外傷過熱の食物等  
症候は胃痛あり食後に増劇し時々咖啡様の血液を吐出す豫後概ね良なり  
療法は絶對の安靜を命じ牛乳の如きものを攝らせ胃部の冷奄法を行ひ鍼灸禁す

九 胃癌

原因は不明なるも胃壁に發する腫物にして四十歳以上の男子に多發す  
症候は食慾不進胃痛あり嘔吐を發す吐物には麥酒様の血液を混す衰弱して死す  
療法は流動食を攝らしめ輕き按腹輕き鍼灸は苦痛を輕減するの効あり

十 急性腸加答兒

原因は急性胃カタルと略々同一なり  
症候は腹痛雷鳴下痢鼓張を發し口渴を訴へ小腸に發するものは下痢なし豫後良  
療法は絶食安靜温包を命じ鍼灸は臍部（天樞）下腹部（中極）鼠蹊部（維道府舍）側腹部（大横）腰部（腎俞大腸俞）下腿（三里）等に施すべし

十一 慢性腸加答兒

原因は急性より移行し又た肝心肺の病より續發す  
症候は便通不規則にして或ひは下痢し或ひは秘結し下腹膨滿腹痛あり衰弱す



療法は原因療法を第一とし食物に注意し運動入浴を命じ按腹をなし鍼灸前處

十二 便秘症

原因は腦脊髓病慢性腸カタル坐業黃疸貧血等なり

症候は便秘し早きも三日に一度の便通にて腹部膨滿消化障害憂鬱を發す豫後良  
療法は蔬菜を多食せしめ運動を行はせ按腹を施し急性腸カタルと同處に鍼灸す

十三 腸疝痛

原因はヒステリ中毒寄生蟲腸カタル等なり

症候は腹部に發作性劇痛を發し其の部に蟲樣隆起を現はし雷鳴あり顔色蒼白冷  
汗を流し強壓又は脱糞放屁に由て輕快す豫後は良なり  
療法は腹部の温奄法按腹等を行ひ鍼灸は急性腸カタルと同處に施すべし

十四 盲腸炎

原因は糞石異物の嵌入急性傳染病骨盤内の炎症等なり

症候は右鼠蹊部の緊滿あり盲腸の腫張劇痛を發し便秘口渴嘔吐を伴ひ發熱す  
療法は平臥し流動物を攝らしめ奄法を施し鍼灸は腰部下肢等に誘導的に施す

十五 黃疸

原因は胆管カタル胆石癌腫傳染病等なり

症候は皮膚尿等黄色を呈し皮膚瘙癢を感ず便秘を來す肝部の壓痛あり豫後良  
療法は安靜にして刺戟性飲食物を禁じ背部(肺俞肝俞)上腹部(巨闕鳩尾)右  
季肋部(期門)等に鍼灸を施すべし

十六 膽石疝

原因は胆嚢内に結石を生ずるものにして美食安逸又は肝臟病等なり

症候は肝臟部に俄かに劇痛を發し直に上腹部肩胛部に放散す黃疸便秘を來す  
療法は吸息と同時に手掌を以て肝臟を壓迫し胆石の排泄を圖り鍼灸點は前に同



## 第二章 呼吸器病の療法

### 一 鼻加答兒

原因は寒胃傳染病其他種々の刺戟等なり  
 症候は鼻腔の癢痒噴嚏を發し鼻涕を流し閉塞す慢性は粘膜の萎縮又肥大を來す  
 療法は身体を温包し酒菓を禁し寒氣を避け頰部（禾窰頰車）頸部（天柱風池）  
 等に鍼灸を施すべし又た顔面マツサーシ効あり

### 二 喉頭加答兒

原因は寒胃過度の發聲傳染病其他種々の刺戟等なり  
 症候は癢痒を感じ咳嗽喀痰あり哽聲を來す又た壓痛あり急性は熱を伴ふ  
 療法は前者と同じ攝養法を行ひ頸部の按摩を行ひ頸部（天突水突風池）肩部  
 （肩井肩外）等に鍼灸を施すべし

### 三 氣管枝加答兒

原因は寒胃不潔物の吸入に因る慢性は肺臟心臟病より來る  
 症候は胸骨後部に壓迫様の鈍痛あり咳嗽喀痰呼吸困難を來す急性は熱發す  
 療法は身体殊に胸部を温包し濕潤にして温暖なる空氣中に浴し酒菓等を禁じ鍼  
 灸は胸骨上窩（天突）胸骨上半部の兩側及び背部四革の穴に施すべし

### 四 氣管枝喘息

原因は呼吸中樞の病變ならむと云ふ呼吸器病種々の香臭氣候等より來る又た胃  
 腸子宮等より反射的に發する反射性喘息最も多し  
 症候は發作的に氣管枝筋肺胞又は横隔膜攣縮する爲め呼吸困難を來し顔色蒼白  
 となり冷汗を流し胸内苦悶の狀を呈す喘鳴咳嗽喀痰をも發す豫後原因に關す  
 療法は原因の除去に努め前者と同處の外項部天柱風池に鍼灸す

### 五 肺炎

原因加答兒性は氣管炎の波及傳染病等にしてコロツア性は特異の細菌なり  
 症候は呼吸困難咳嗽喀痰等あり發熱すなほコロツア性は三期に分つ一期二期は



鼓音捻髮音二期は濁音氣管枝音を發す又た刺が如き疼痛と鑄色痰を見る  
療法は胸部の濕布平臥安靜は効ありと雖も鍼灸の効を認めず

### 六 肺癆 (肺結核)

原因は結核菌にして結核質 胸扁平頸細長のもの(人をも多く侵す黴菌は空氣と共に侵入すること多し營養不良精神憂鬱氣管病等第二原因となる  
症候は初め違和を覺へ咳嗽咯痰あり衰弱に陥り弛張熱を發し盜汗あり血痰を見るに至る

豫後は不良なりと雖も初期に攝生治療を怠らざれば治癒すること多し

療法は滋養強壯の法を論じ按腹に兼ね背部(四華)腹部(巨闕天樞)に鍼灸すべし

### 七 肺氣腫

原因は努責氣管枝カタル喘息等にして壯年以上の男子に多く發す  
症候は肺の彈力衰へたる爲め空氣を呼出すること能はずして肺胸廓共に膨張す

療法人工呼吸的運動法を行ひ胸腹を按摩し前者と同處に鍼灸すべし

## 第三章 泌尿器病の療法

### 一 腎臟炎

原因は寒冒傳染病(殊に娼紅熱梅毒等)中毒種々の刺戟慢性は心臟病より來る  
症候は惡寒發熱に次で頭痛腎臟部の疼痛を發し嘔氣浮腫尿量減少を來す而して浮腫は顔面に初發す慢性は惡寒發熱なきも治し難し

療法は安靜を命じ刺戟性飲食物を禁じ牛乳の如きものを攝らせ發汗療法として脊柱の兩側に温灸を施し尙ほ腰部(三焦俞腎俞)側腹部(帶脉)に鍼灸すべし

### 二 腎石疝痛

原因は結石にして美食安逸又は強烈なる酒精飲用等なり  
症候は結石の輸尿管を閉塞する爲め俄かに腰痛を發して畢丸膀胱背部等に放散



す利尿頻數にして其の量少なく時に發熱浮腫を來すことあり豫後屢々反覆す  
療法は肉類酒等を節減し運動を勸め腎部を温包し鍼灸は前者と同處に施すべし

### 三 膀胱加答兒

原因は細菌にして寒胃外傷傳染病及び近部臟器の炎症等なり  
症候は尿意窘迫にして利尿の際に疼痛あり尿溷濁すなほ急性は惡寒發熱を伴ふ  
療法は温浴をなし刺戟性飲食物を禁じ排尿は充分になし急性は安靜を執り又た  
便秘を防ぐべし鍼灸は下腹部（中樞横骨）腰部（大腸俞）薦骨部（膀胱俞中膂  
俞）足の三里等に施すべし

### 四 膀胱癱痺

原因は脊髓又は椎骨病膀胱の損傷チブスの如き傳染病等なり  
症候は利尿筋癱痺は尿閉を起し下腹部膨隆し括約筋癱痺は絶へず利尿す  
療法は按腹冷水坐浴電氣等を施し鍼灸は前者と同處に行ふべし

### 五 膀胱瘻

原因ヒステリ子宮病等なり症候利尿頻數にして排尿の際疼痛あり尿量少なし療  
法同上

### 六 遺尿症

原因は腦脊髓病養育不良夜間の飲食腸胃病膀胱病等にして小兒に多く發す  
症候は睡眠中に尿を漏す患兒は放尿の夢を見ること云ふ豫後良なり  
療法は就床前に排尿せしめ飲料を節し滋養を攝らしめ電氣按腹を行ひ前者と同  
處に鍼灸すべし第四薦骨假棘下の灸治一點は著効あり

## 第四章 生殖器病の療法

### 一 陰萎

原因は手淫精神感動脊髓病中毒糖尿病腎臟睪丸病等なり症候は交接不能なり  
療法は患者を慰藉し冷水浴電氣按腹を行ひ滋養を攝らしめ鍼灸は前者と同處に



### 二 陰囊水腫

原因は外傷痲毒畢丸炎等にして症候は陰囊腫張し急性は發熱疼痛あり豫後良  
療法は陰囊を提舉し燻法を行ひ下腹部（横骨）薦骨部（膀胱俞）に鍼灸すべし

### 三 子宮内膜炎

原因は月經時分娩及び産後の不攝生痲毒其他の傳染病手淫寒冒等なり  
症候急性は惡寒發熱に初まり骨盤内壓重を感じ水様膿様の液を漏し慢性は月經  
血増加し水様若くは膿様液を洩し下腹疼痛あり消化障害頭痛憂鬱を伴ふ  
療法は交接刺戟食を禁じ腹部の濕布坐浴急性は安静を命じ鍼灸は膀胱炎と同處

### 四 子宮出血

原因は子宮の腫瘍又は收縮不全内膜炎等にして症候は即ち出血なり  
療法は平臥を命じ下腹に冷燻法を行ひ薦骨部（膀胱俞）下腿（三里）に鍼灸す

### 五 月經性疝痛

原因は子宮頸管の狹窄又は屈曲其他卵巢病等なり  
症候は月經の際下腹部に發作性劇痛を發し腰部大腿に放散す壓すれば輕快す  
療法は下腹部（横骨中極）腰部（大腸俞）薦骨部（膀胱俞中膂俞）に鍼灸す

## 第五章 胸腹膜病の療法

### 一 肋膜炎

原因は感冒外傷肺炎種々の傳染病等なり  
症候は濕性乾性の別ありて甲は發熱し滲出液の出るに従ひ漸次疼痛を減じ呼吸  
困難となり液に壓せられて肝心肺は位置を轉ず打診に由て濁音を發す乙は呼吸  
に乘じ截るが如き疼痛を發し聽診に由て摩擦音を聽く本病は多く一側に發す  
療法安静を命じ患胸に溫濕布を施し鍼灸は患部の肋間背腰部脊柱筋上に施す  
胸水は胸膜水腫にして肺心腎の病等より來り兩側に發し呼吸微弱となり胸廓擴  
大し肋間平坦となり打診に由り濁音を發す又た肝肺の轉位を見る療法同上

### 二 腹膜炎



原因は臓器の炎症寒氣傳染病等にして慢性は急性より移り多くは結核性なり  
症候急性は悪寒發熱し腹部緊滿劇痛を發し嘔氣便秘を來す慢性は腹部膨滿し消  
化障害を起し漸次衰弱す豫後疑はし

療法急性は流動食を堪らしめ濕布を行ひ誘導鍼灸に止め慢性には按腹鍼灸可施  
腹水は腹膜水腫にして腹膜炎肝心肺の病等より發し腹部膨滿して呼吸を害し打  
診に由て濁音を發す慢性腹膜炎と共に腸カタルと同處に鍼灸を施すべし

### 第六章 循環器病の療法

#### 一 心臓内膜炎

急性は關節レウマチス梅毒等より來り悪寒戰慄に次で熱發し譫語を發す聽診に  
由て雜音を聽く慢性は多く急性より移行し辨膜の肥大萎縮等を來して所謂辨孔  
の閉鎖不全或ひは狹窄を發し全身浮腫を續發す豫後多くは不良なり刺戟性飲食  
物過度の運動熱浴を禁じ急性は平臥し心臓部に氷奄法を行ふ全身マッサージ及  
び背部其他に鍼灸を施すべし

原因は貧血ヒステリ神經衰弱其他迷走神經の壓迫等なり  
症候は心臓に變化なく心悸亢進脈搏増加し胸部苦悶を訴へ心臓部に疼痛あり  
療法は精神を鎮め身体を安靜に保ち心臓部に振顫法を行ひ原因に向つて鍼灸す

#### 二 神經性心悸亢進

### 第七章 神経系病の療法

#### 一 腦充血

原因は動脈充血は精神感動飲酒熱浴等にして靜脈充血は心肺の病より來る  
症候頭痛眩暈耳鳴嘔氣四肢の痙攣麻痺を發すなほ甲は顔面潮紅乙は頸靜脈怒張  
療法頭部を高くして氷囊を點じ光響の刺戟を避け按腹を行ひ腹部(中極中腕)肩  
部(大杼肩井)下肢(伏兔三里三陰交)に鍼灸を施すべし

#### 二 腦貧血



原因は久しき下痢多量の失血腦動脈の痙攣精神の感動等なり  
 症候は頭痛眩暈耳鳴を發し瞳孔散大して顔色蒼白となり急性は失神す豫后概良  
 療法平臥せしめて頭部を低くし顔胸に冷水を注ぎ茶咖啡等を與へ慢性には滋養  
 強壯の法を講じ按腹を行ひ頭部(百會天柱)に鍼灸し急性には四肢に強刺激を加  
 ふべし

三 腦 出 血 (卒 中)

原因腦動脈瘤ありて之が努責熱浴飲酒劇動精神感動等によつて破裂す老人に多し  
 症候多くは俄かに卒倒し人事不省となり呼吸脈搏共に緩徐なる又た半身の知  
 覺運動麻痺す豫后は出血の部位に由る尙ほ出血部に依りて麻痺に差あり  
 療法暗室に平臥せしめ頭部を高くして氷嚢を點し腹部下肢等に鍼灸すべし  
 此發作期は危険なれば醫師に讓るを良策とす  
 半身不隨前記卒中其他の原因に依り半身の運動麻痺を來す之に對する治療は飲  
 酒劇動努責熱浴精神の興奮等を慎み便通を良くし患部のマッサージ運動電氣療

法を行ひ項部(天柱風池)背部(大杼)上肢(肩髃消灤三里)下肢(伏兔三里三陰交)  
 腹部(天樞石關)に鍼灸すべし

四 脊 髓 癆

原因は多く梅毒にして壯年の男子を侵す  
 症候身体處々の神経痛に初まり歩行手の運動等自由を缺き利尿失禁胃痛疝痛嘔  
 吐等を發し關節の腫張變形をも招來す膝蓋腱反射消失す  
 療法下肢の過勞を避け刺戟性飲食物を禁じ電氣マッサージ鍼灸は宜しく對症的  
 に施せば効なきにあらず

五 神 經 痛

神経痛は發作性に劇しく痛み其の神経の筋膜を貫き或ひは骨孔を出る處に於て  
 壓すれば特に知覺過敏を訴ふ之を疼痛點と稱す而して神経痛は壓迫に由て疼痛  
 輕快するものなり  
 療法は第一原因を除くことに努め電氣マッサージ鍼灸は勿論伸展法温濕布等を



行ふべし

六 三叉神經痛（顔面痛）

原因は寒胃傳染病腦底腫瘍の壓迫ヒステリ貧血等なり  
症候顔面の一部若くは全部に發作性疼痛を發し潮紅す頑固のものは毛髮白色に  
變じ又た落脱す疼痛點は内皆の上方顳骨結節の前後及び下顎隅の前方にあり  
療法顔面（攢竹禾窠下關大迎）頭蓋（上關角孫天桂）項部（風池）等に鍼灸す

七 後頭神經痛

本症は多く大後頭神經を犯す疼痛點は乳嘴後窩にあり風池天柱に鍼灸すべし

八 助間神經痛

原因は貧血ヒステリ脊髓癆又は子宮病等より反射的に來る  
症候多く左胸に發し第五乃至第九肋間に發し疼痛點は脊柱の外方胸骨の外方及  
び胸肋部にあり深呼吸噴嚏咳嗽等に由て疼痛増加す胸筋レウマチと誤る勿れ

療法疼痛點部に壓迫揉捏を行ひ鍼灸を施すべし但し鍼は上方に向け刺すべし

九 腰腹神經痛

本症は腰部下腹部鼠蹊部陰部に亘る疼痛を發す腰部の深鍼灸治し壓迫は著効あり

十 股神經痛

本症は大腿の前面下腿の内側に疼痛を發し歩行等に由り疼痛増劇す按鍼灸有効

十一 坐骨神經痛

原因は寒胃過勞骨盤内腫瘍の壓迫脊髓癆梅毒糖尿尿病妊娠等なり  
症候疼痛は他と異り概ね持續性にして臀部より膝膕窩に趣き又た往々外踝に達  
するこごあり運動に由て疼痛増加す筋肉は漸次消瘦す疼痛點は大轉子の後方膝  
膕窩腓骨小頭の後部外踝の前部等にあり  
療法下肢の過勞冷却を避け電氣按摩神經伸展法等を行ひ鍼灸は骨盤部（八髎環



跳) 大腿後側(承扶段門浮劇) 膝部(委中委陽陽陵泉) 下腿(三里陽交合陽承筋三陰交)等に鍼灸すべし何れの場合も疼痛點に施術すべし

十二 上肢神經痛

本症は膊神經叢より起る神經の分布區域に發するものにして部位に依り更に何々神經痛と稱ふ疼痛點は鎖骨上窩上膊後側の中央上膊内上踝の後部等にあり宜しく上肢マシサージを施し疼痛點部若くは其の近傍に鍼灸すべし

十三 神經痲痺

本症は運動神經の機能と失ひ爲めに筋の收縮するこ能はざるに至るものにして種々の原因より來り中樞性は痲痺の區域廣く末梢性は一部にして區域狹し而して筋の瘦削を併發するものなればマツサージ感傳電氣を併用し鍼灸は神經幹に向つて施し筋には特に温灸を施すべし

十四 顔面神經痲痺

原因は寒胃外傷腦底腫瘍の壓迫耳病等なり 症候多くは一側に發し口角傾斜眼瞼半開す吹笛不能咀嚼困難となる 療法三叉神經痛施術點の外聽宮翳風頰車顳髎等に鍼灸すべし

十四 顔面神經痙攣

原因は反射的に來り其他は顔面神經の中樞或は末梢に病あるに由る 症候は多くは一側に發し顔は患側に傾斜す 療法は前者に略々同ト

十五 横隔膜痙攣(吃逆)

原因は横隔膜神經の刺戟にして腦脊髓病胃腸病子宮病ヒステリ等なり 症候吸氣の際急に聲門閉鎖するものにして暫時にして治さ雖も數週に亘るものあり

療法は精神の轉換を圖り鎖胸乳嘴筋の上半部第九乃至十二胸椎の兩側に壓迫を行ひ按腹を施し頸部(風池天窓)上腹部(巨闕)背部に鍼灸すべし



十六 書 痙

原因上肢の職業的痙攣にして過勞に因す即ち書家畫家琴家電信技手等に發す  
症候は技を爲すに當りて手指に痙攣痲痺振顫等を發して爲す能はず  
療法は上肢を按摩し肩髑消棘狹白三里陽池合谷等に鍼灸すべし

十七 神經衰弱

原因精神の過勞手淫色慾興奮種々の中毒胃腸病肺病子宮病等なり  
症候神經の興奮し易くして直に疲勞に陥るものなり勢力衰へ頭痛不眠頭重諸處  
の疼痛心悸亢進消化障害等にして此れらの諸症變化し易し

十八 比斯的兒

原因婦人に多く發するものにして精神感動營養不良運動不足種々の中毒等なり  
症候神經痛知覺鈍痲運動痲痺痙攣等を發しこの諸症時々増減し或ひは轉位し精  
神過敏にして疲勞し易く喜怒哀樂の情に迫り心悸亢進消化障害を發す

療法神經衰弱と共に患者を慰藉し精神の轉換を圖り冷水浴運動滋養食マツサ  
ジ電氣療法等に兼ね患者の苦痛を訴る部分に鍼灸術を行ふべし素より原因に由  
ると雖も頭部(天柱百會)背部(肩井風門)腹部(巨闕中極天樞)の鍼灸は著効あり

十九 偏頭痛

原因女子に多發す心身の過勞精神感動食事の不攝生等なり  
症候頭部の一側に發作性疼痛を發し眩暈嘔心嘔吐あり音光熱等の刺戟感受過敏  
となる

療法原因を除き刺戟を避け頭部(角孫客主人天性)頸部(風池)に鍼灸すべし

第八章 運動器病の療法

一 筋肉痲痺質斯

原因は一種の傳染毒にして寒冷過勞濕潤外傷等に由て誘發す  
症候は筋に腫張疼痛を發して運動を障害す壓すれば疼痛増加す本症は部位に従



ひ名稱を附す例へば腰に來れば腰筋リヨマチス胸に發すれば胸筋レウマチスと稱ふるが如し故に其部くに於て前記の症狀を顯はすものこす

療法濕性マツサージ濕布等に兼ね患部の筋腹及び其の中樞の方に鍼灸すべし運動寒冷等は避くべし

## 二 關節痲痺質斯

原因は一種の傳染毒にして寒冷過勞濕潤等により誘發す

症候急性は惡寒あり發熱して一個若くは數個の關節腫張し疼痛灼熱を感じ運動障害を來す又た發汗及び消化障害を來す慢性は熱候なし本症も亦た部位に従ひ名稱を附す例へば肩關節リヨマチ股關節レウマチと稱ふるが如し

本症は慢性に移り畸形性關節炎を來すことあり

療法急性は安靜を命じ濕布を施し刺戟性飲食物を禁じ誘導的に鍼灸マツサージを施し慢性には患部に濕溫布温灸マツサージを行ひ運動法を施すべし

## 三 關節炎

原因はレウマチス梅毒淋毒結核外傷痛風等なり

症候關節は腫張し疼痛あり灼熱を感じ運動を害す而して慢性は諸症狀輕微なり

と雖も運動の回復は困難なり

療法急性には安靜を命じ濕布を行ひ上部に誘導的鍼灸マツサージを施し慢性には患部に按摩鍼灸を施し運動法を行ふべし

## 第九章 全身病の療法

### 一 糖尿 尿病

原因不詳なれども髓髓の外傷脂肪過多痛風等は原因なるが如し

症候食を貧るにも拘らず身体衰弱して口渴を訴へ尿量増加して一日中に四千乃至一萬グラムを排泄す多くは便秘し鼓張を來す豫后概ね不良

療法食物に注意し運動入浴をなさしめ按摩を行ひ鍼灸は背部腹部等に宜しく施



すべし

二 全身貧血

原因は多量の失血血液製造の不足等なり  
症候皮膚粘膜蒼白となり頭痛眩暈心悸亢進四肢厥冷あり疲勞し易し  
療法滋養強壯の方法を講じ鍼灸は前者に同じ

三 肥満病

原因は美食安逸又は遺傳等にして症候は組織に脂肪沈着し爲めに肥満し食慾不  
進胃部壓重と感ず療法は運動粗食温浴マッサージ鍼灸何れも効あり

四 痛風

原因は美食を攝り運動を厭ふ者又た遺傳等にして症候は初め食進まず腓腸部の  
痙攣あり熱を發し趾指の關節に炎を發して夜間には疼痛増劇す療法は前者に同

五 脚氣

原因は不明なり近時一種の傳染毒なりと云ふ

症候先づ足部より知覺鈍麻を以て初まり關節弛緩し腓腸部の壓痛あり麻痺を發  
して下腿大腿腹部口唇に昇り心悸亢進搏脈増加消化障害便秘を來す(乾性)之に  
水腫を伴ひ(濕性)なほ諸症狀増悪して呼吸促進を來す(急性)に至れば心臟麻痺  
を來すの恐れあり

療法は高燥の地に轉地し運動を慎み刺戟性飲食物を禁ト麥飯蔬菜を攝らせ按腹  
に輕き下肢のマッサージを施し鍼灸は大腿(伏兔段門)膝部(膝眼委中)下腿(三  
里三陰交)足部(湧泉地五會)等に施すべし脚氣八處の灸は古來の名灸なり即ち  
風市伏兔膝眼犢鼻三里上巨虛下巨虛陽輔之なり

第十章 雜病の療法

一 齒痛



原因は齶齒齒齦炎神經痛の波及等なり

症候は患齒に發作性疼痛を發し食物の攝取談話等に由り増劇す咀嚼困難なる療法頸部を按摩し上齒なれば顛顛窩(上關)鼻翼の外方(禾竇)下齒なれば下顎隅の前方(大迎)及び上方(頰車下關)に鍼灸すべし  
但し何れも惱める齒根乳嘴後窩(風池)上肢(三里合谷)の刺鍼を怠るべからず

二 衄血

原因は頭部の鬱血鼻カタル外傷傳染病等にして症候は即ち鼻出血なり療法は鼻部の冷番法を行ひ頂部(天柱風池)に鍼灸すべし

三 乳房痛

子宮病ヒステリ乳什過多等より來る乳房を按摩し温包し背部(巨骨厥陰俞)に鍼灸すべし其他泌乳過多症には下腹部の鍼灸(曲骨)按摩を行ひ乳汁減少症には乳

房を揉み温濕布を行ひ精神の興奮劇し運動等を禁すべし

四 小兒急痢

原因は蛔虫或ひは胃腸内の異物生齒困難精神感動其他便秘下痢腦病等なり  
症候は停泣し痙攣強直等を發し顔色蒼白となり人事不省に陥る  
療法原因に向つて治療し腹部(幽門中極)四肢の知覺過敏なる部(合谷湧泉三里)等に鍼灸を施すべし發作の間歇時には安靜を命すべし

五 小兒夜驚症

原因は胃腸病精神感動扁桃腺肥大等なり  
症候は睡眠中突然醒覺し恐怖を發して號泣し暫時にして再び安眠し患兒は翌朝に至り之を記憶することなし豫后良なり  
療法は原因の除去に勉め按腹を行ひ背部(身柱)腹部(水分)に鍼灸すべし



大正九年八月十五日印刷  
大正九年八月廿一日發行

正價金貳圓

著者 小野田 範司  
大分市細工町五九七番地

發行者 平岡 定次郎  
大分市古川町五百九十七番地

印刷者 野崎 板太郎  
大分市大字大分一四〇九番地

印刷所 大分印刷株式會社  
大分市大字大分南新地四百四拾五番地



發行所 大分市細工町五九七番地  
振替口座福岡四四三三番  
大分市竹町二丁目  
九二四八番  
大分鍼灸講習所  
賣捌所 金洋堂書店



大分盲啞學校鍼灸科教員 小野田範司著  
大分縣立病院マツサージ

第二版

衛生治療 按摩術精義

四號活字總ふりかな附紙質  
極上等壹百六十頁寫眞版及  
び説明圖挿入正價金壹圓五  
十錢小包送料内地十二錢

教授受験及び臨床家を目的に著はしたる本書はマツサージ術並びに按摩術の總論各論及び實地應病編よりなり整形繃帶術醫療用体操法電氣マツサージ法熱療法等をも併せて詳述したる無類の良書なり。

鍼灸術マツサージ教授

大分市細工町

大分鍼灸講習所



150  
194



終

